

回帰分析によるわが国フードサービス業4社の 連結および個別財務諸表の経営分析

Analysis of Consolidated and Individual Financial Statements of
Four Japanese Food-service Companies by Regression Analysis

竹 森 一 正

Kazumasa TAKEMORI

目 次

1. フードサービス業の経営分析の意義
2. 回帰分析による経営分析の意義
3. 売上高の推移
4. 営業利益の推移
5. 経常利益の推移
6. 固定資産の推移
7. 正味運転資本の推移
8. 流動比率の推移
9. 会社別の分析結果
10. まとめ

参考文献

注

- 資料1. 『企業財務データバンク』の概要
資料2. LotusApproachによる『企業財務データバンク』の利用方法
資料3. 連結経営分析の展開
資料4. キー操作
資料5. 図表目次

1. フードサービス業の経営分析の意義

わが国のフードサービス業は、業界全体の売上高が約28.8兆円であり、従業者数は474万人の規模である^(注1)。社会生活の変化を背景に外食・フードサービスの市場は

拡大しつつある。市場規模が大きい反面、関連する企業の95%が従業員7名以下の零細規模であり、上場企業は14社に届まっている^(注2)。

食自体の歴史は古いかかわらず、フードサービス・ビジネスとしての業界の歴史が新しいために、経営管理関連の研究は近年始まったばかりであり、今後の進展が待たれている^(注3)。この事情は同業界についての管理会計においても同様であり、わが国の優れたフードサービス業の実務の現状を分析して、問題を明らかにすること、更に知識の体系化が求められる。

管理会計の手順は、一般に経営分析により経営管理上の問題を明らかにし、問題解決のための意思決定の方法を探り、更に業績評価の方法を探るとされる。当稿においては、フードサービス業における管理会計を研究する第一歩として財務諸表を中心とした経営分析を行う。財務諸表は、連結財務諸表と個別財務諸表を使用する。

分析会社は、連結財務諸表の開示が10年以上に及んでいる、すかいらーく、西洋フードシステムズ、モスフードサービスおよびリンガーハットの4社とする^(注4)。

分析期間は、1987年～1996年の決算期とする（すかいらーくは1986年～1995年、この年のずれについては、当稿末の資料3の中の「第7表」を参照のこと。）

2. 回帰分析による経営分析の意義

当論における分析は、回帰分析による。回帰分析を利用するメリットは、分析期間についての1次式を求めることによって最小自乗法による傾向を得られること、y式により得られる内捜または外捜による推定値の信頼性および68%の信頼性による上下の許容幅を得られることである。これにより、どの年度の値がy式を形成する過程で突出していた値であるか、すなわち、高成長であるかのように見える大幅な増加もY値偏差を越えていれば、2～3年後には必ずその反動としての落込みが現れる。例えばバブル期の頃の売上高とバブル期以後の売上高が好例である。

Y値偏差を下回る場合は経営上の問題が生じている証拠であり、これからの脱出は大改革を必要とする。R²乗値はx係数を中心としたy式の信頼性を計る係数である。1.00に近い程信頼性が高く、0.00に近い程低いことを示す。データのばらつきが大きいと信頼性は小さくなり、ばらつきが小さければ信頼性は大きい。

以上の意義より、4社についての10年間の、x係数、Y切片、Y値の標準偏差（以下、Y値偏差という）、R²乗値（以下、R²という）を調査した（第1表～4表）^(注5)。

第１表 すかいらーくの回帰分析

連結売上高	$y = 152.4x - 300.85$ (± 65.5, 0.98)
連結営業利益	$y = 1.4x - 2,577$ (± 12.8, 0.10)
連結経常利益	$y = -0.3x + 696$ (± 19.3, 0.00)
連結固定資産	$y = 114.13x - 226,268$ (± 54.8, 0.98)
連結正味運転資本	$y = -36.8x + 73,436$ (± 139.6, 0.42)
連結流動比率	$y = -15.7x + 31,290$: 単位は% (± 35.3, 0.67)
個別売上高	$y = 58.5x - 115.33$ (± 87.2, 0.42)
個別営業利益	$y = -1.2x + 2,522$ (± 10.9, 0.11)
個別経常利益	$y = -1.4x + 2,846$ (± 16.1, 0.07)
個別固定資産	$y = 79.1x - 156,750$ (± 35.2, 0.98)
個別正味運転資本	$y = 145.6x + 29,178$ (± 980.2, 0.19)
個別流動比率	$y = -17.2x + 34,526$: 単位は% (± 95.7, 0.25)

注：y式は，x係数とY切片により得た1次式である。かっこ内は，
Y値偏差とR²である。

第２表 西洋フードシステムズの回帰分析

連結売上高	$y = 49.3x - 97,379$ (± 65.5, 0.88)
連結営業利益	$y = 3.0x - 5,884$ (± 7.5, 0.62)
連結経常利益	$y = -0.9x + 1,916$ (± 6.4, 0.18)
連結固定資産	$y = 84.0x - 166,621$ (± 59.9, 0.95)
連結正味運転資本	$y = -20.3x + 40,517$ (± 98.1, 0.62)
連結流動比率	$y = -17x + 33,412$: 単位は% (± 55.5, 0.48)
個別売上高	$y = 41.5x - 81,808$ (± 58.8, 0.84)
個別営業利益	$y = -3.2x - 6,267$ (± 8.8, 0.57)
個別経常利益	$y = -0.4x + 822$ (± 6.3, 0.04)
個別固定資産	$y = 41.5x - 81,808$ (± 58.8, 0.84)
個別正味運転資本	$y = -20.5x + 40,993$ (± 99.2, 0.57)
個別流動比率	$y = -16.6x - 33,269$: 単位は% (± 59.6, 0.44)

注：記載の形式と方法は第１表に同じ。

第3表 モスフードサービスの回帰分析

連結売上高	$y = 57.1x - 113,227$ (± 25.1, 0.98)
連結営業利益	$y = 5.6x - 11,079$ (± 2.8, 0.98)
連結経常利益	$y = 5.5x - 10,920$ (± 3.4, 0.96)
連結固定資産	$y = 36.5x - 72,541$ (± 26.6, 0.95)
連結正味運転資本	$y = 8.0x - 15,906$ (± 31.2, 0.41)
連結流動比率	$y = -1.5x - 2,721$: 単位は% (± 53.2, 0.01)
個別売上高	$y = 51.7x - 102,599$ (± 23.4, 0.98)
個別営業利益	$y = 5.7x - 11,286$ (± 2.8, 0.98)
個別経常利益	$y = 5.6x - 11,196$ (± 3.8, 0.96)
個別固定資産	$y = 37.7x - 74,127$ (± 30.5, 0.94)
個別正味運転資本	$y = 7.1x - 14,040$ (± 29.5, 0.37)
個別流動比率	$y = -5x + 10,163$: 単位は% (± 64.6, 0.06)

注：記載の形式と方法は第1表に同じ。

第4表 リンガーハットの回帰分析

連結売上高	$y = 18.1x - 35,814$ (± 90.0, 0.98)
連結営業利益	$y = 1.1x - 2,189$ (± 2.8, 0.62)
連結経常利益	$y = -0.2x + 362$ (± 3.4, 0.03)
連結固定資産	$y = 10.0x - 19,855$ (± 14.4, 0.83)
連結正味運転資本	$y = -1.8x + 3,484$ (± 13.3, 0.15)
連結流動比率	$y = -3x + 6,240$: 単位は% (± 22.1, 0.17)
個別売上高	$y = 10.5x - 20,732$ (± 80.0, 0.98)
個別営業利益	$y = 0.5x - 1,014$ (± 2.8, 0.26)
個別経常利益	$y = 0.6x + 190,889$ (± 3.6, 0.06)
個別固定資産	$y = 6.7x - 13,148$ (± 15.9, 0.64)
個別正味運転資本	$y = 1.0x + 1,909$ (± 11.7, 0.06)
個別流動比率	$y = -3x - 5,377$: 単位は% (± 26.2, 0.10)

注：記載の形式と方法は第1表に同じ。

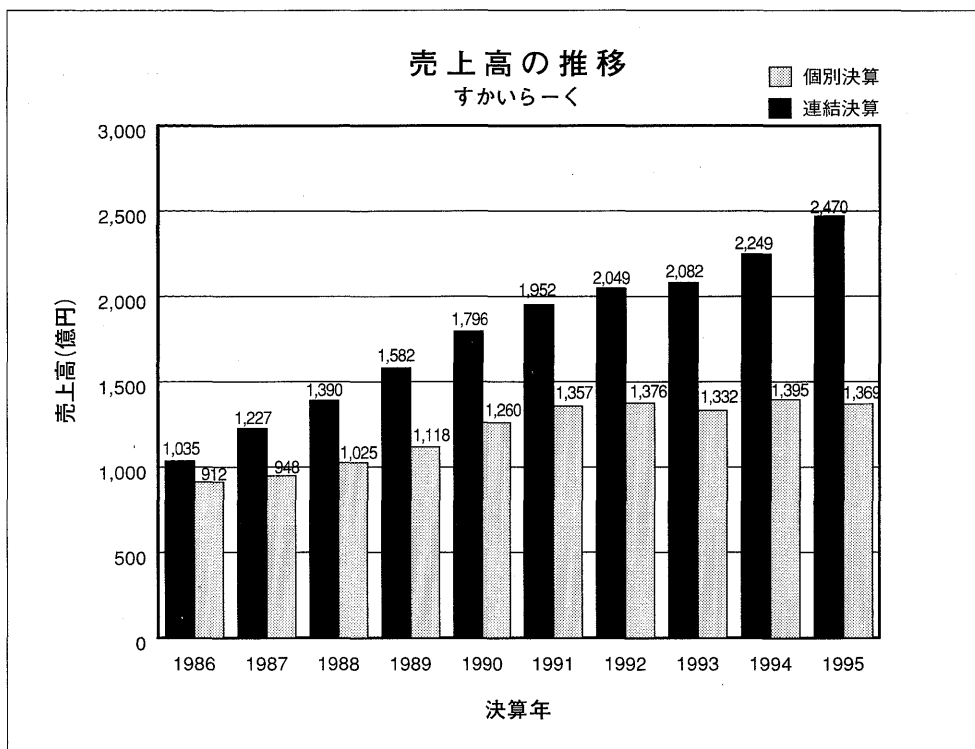


図1 すかいらーくの売上高の推移

3. 売上高の推移

(1) すかいらーく

すかいらーくの売上高は、連結では順調に伸びが見られる(図1)。連結売上高^(注6)は1986年に1,035.34億円であり、その後ほぼ直線的に右上がりとなっている($y = 152.4x - 300.85$)。しかし、個別では1991年から漸増であり、1,400億円近辺で緩やかな増加を示すに留まっている($y = 58.5x - 115.33$)。

連結売上高のY値偏差は65.5(単位億円、以下同じ)の狭さであり、最終年度である1995年度の連結売上高に対する比率は、2.7%である。個別売上高の

Y値偏差は87.2の狭さであり、最終年度である1995年度の個別売上高に対する比率は、6.0%である。連結R²は0.98であり、y式の信頼性は高い。ただし、個別R²は0.42の低さであるから、y式の信頼性は低い。

以上から、すかいらーくの連結売上高は順調な増加傾向にある。しかし、個別売上高は長期的にはわずかながらの増加傾向にあるとは言えるが、現状は停滞である。

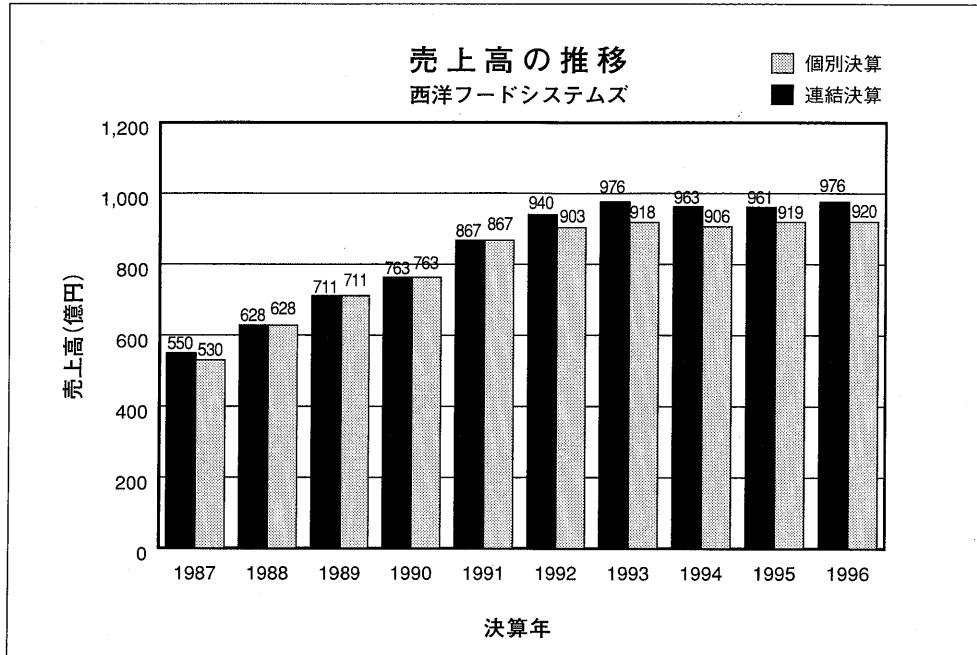


図 2 西洋フードシステムズの売上高の推移

(2) 西洋フードシステムズ

西洋フードシステムズの売上高は、連結では1987年から1992年までは成長であったが、1993年以降からは停滞へと変化した(図2)。1987年に550.08億円であった連結売上高が1993年に975.99億円となるまでは緩やかなほぼ直線的に右上がりの増加となっていたが、1993年以降のバブル期後は900億円台後半で留まっている。これを分析期間全体で見れば非常に緩やかな増加傾向にあるが、1993年以降のみで考えれば成長は止まっていることになる($y = 49.3x - 97,379$)。個別売上高でもこの傾向は同じであり、1987年から1992年までは連結とほぼ同額の直線的な右上がりの増加であったが、1993年以降は900億円前半で留まっている。($y = 41.5x - 81,808$)。

連結売上高のY値偏差は65.5であり、最終年度である1996年度の連結売上高に対する比率は、6.1%である。個別売上高のY値偏差は58.8であり、1996年度の個別売上高に対する比率は、6.4%である。

連結R²は0.88であり、個別R²も0.84の高さであるから、y式の信頼性は連結・個別共に高い。

以上から、西洋フードシステムズの売上高は、現在、連結・個別共に停滞の状況にあるが、長期的には緩やかな増加傾向にあると言える。

(3) モスフードサービス

モスフードサービスの売上高は、連結・個別共に順調に伸びが見られる(図3)。1987年に156.4億円であった連結売上高はほぼ直線的に右上がりとなり1996年には642億円となっている($y = 57.1x - 113,227$)。個別売上高は1995年に600億円を目前に伸びが緩まったが、長期的には順調な伸びである($y = 51.7x - 102,599$)。

連結売上高のY値偏差は25.1であり、最終年度である1996年度の連結売上高に対する比率は、3.9%である。個別売上高のY値偏差は23.4であり、最終年度である1996年度の個別売上高に対する比率は、4.0%である。

連結R²と個別R²は共に0.98の高さであるから、y式の信頼性は連結・個別共に非常に高い。

以上から、モスフードサービスの売上高は、1992年以降に他社が停滞や減少に苦しんでいる中で健闘し、連結・個別共に順調に増加している。

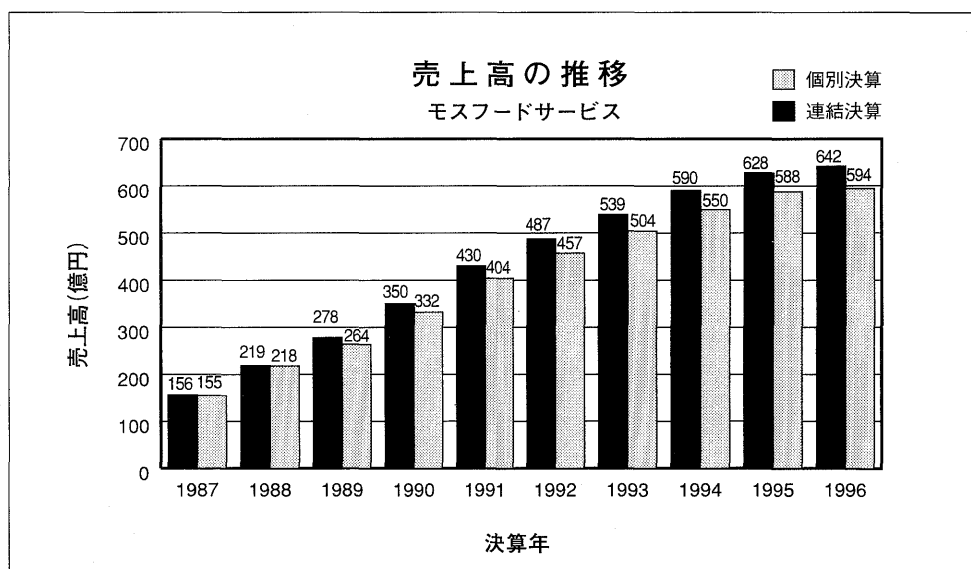


図3 モスフードサービスの売上高の推移

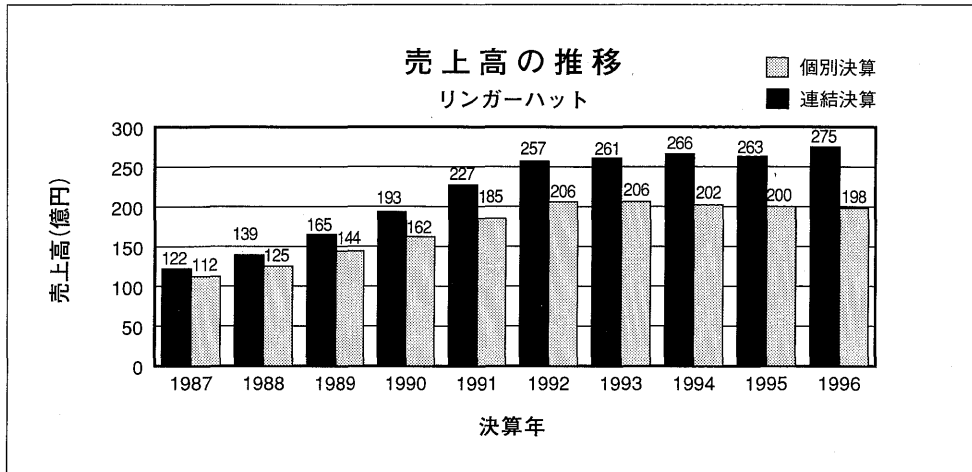


図 4 リンガーハットの売上高の推移

(4) リンガーハット

リンガーハットの売上高は、連結が1987年の122億円から1996年まで順調に伸びたが、1992年を境に伸びの態様は変化している（図4）。1987年から1992年までは急成長、1993年以降は緩やかな成長となった（ $y = 18.1x - 35,814$ ）。しかし、個別売上高は1992年までの伸びは連結とは同じであるが、1993年以降は200億円近辺で留まっている（ $y = 10.5x - 20,732$ ）。

連結売上高のY値偏差は19.1であり、最終年度である1996年度の連結売上高に対する比率は6.9%である。個別売上高のY値偏差は16.8であり、最終年度である1996年度の個別売上高に対する比率は、8.5%である。

連結R2は0.90の高さである。個別R2も0.80の高さであるから、y式の信頼性は連結・個別共に非常に高い。

以上から、リンガーハットの連結売上高は順調な増加傾向にあると言える。個別売上高も長期的には増加傾向ではあるが、1993年以降は停滞している。

4. 営業利益の推移

(1) すかいらーくの推移の分析

すかいらーくの営業利益は、連結では1986年の96.52億円から1991年の137.34億円に向けて上昇していたが、同年を頂点として漸減に転じて1996年で114.35億円となった（図5）。このような前半登り後半下りという2面性を持つ推移を1次式で表記するのは本来無理がある。このような条件付きでの1次式の表記となる（ $y = 1.4x - 2,577$ ）。個別営業利益は1986年の90.15億円から1991年の104.27億円ま

で上昇したがその後減少に転じ、1995年に68.04億円近辺まで低下した。個別売上高についても連結売上高の時と同じ1次式での表記の困難性がある ($y = -1.2x + 2,522$)。

連結営業利益のY値偏差は12.8であり、最終年度である1995年度の連結営業利益に対する比率は、11.2%である。個別営業利益のY値偏差は10.9であり、最終年度である1995年度の個別営業利益に対する比率は、16.0%である。いずれも、売上高が一定した傾向で増加することを示す優れたY値偏差があったにもかかわらず、売上高の伸び以上に売上原価と販売費および一般管理費が上昇して悪化したことになる。

連結R²は0.10であり、y式の信頼性は非常に低い。個別R²も0.11の低さであり、y式の信頼性は非常に低い。

以上から、すかいらーくの営業利益は、連結・個別共に増減いずれかの方向へも明らかな傾向を把握できない。

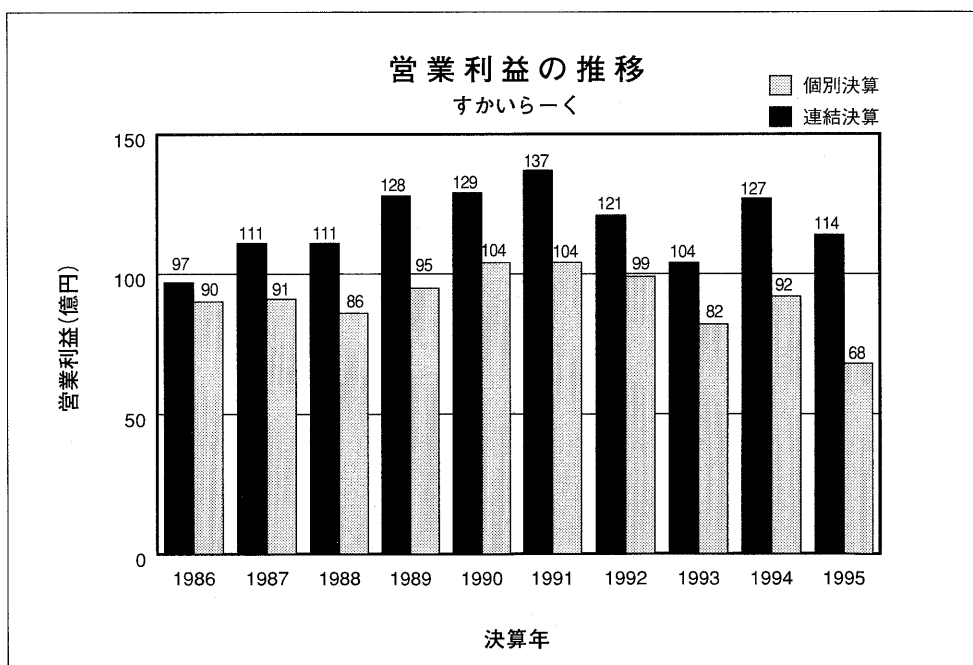


図5 すかいらーくの営業利益の推移

(2) 西洋フードシステムズ

西洋フードシステムズの営業利益は、連結では1987年の550.08億円から1992年

の56.78億円まで増加し、その後は1994年と1995年の落ち込みを含めて、1996年の59.14億円まで減少した(図6)。個別についても連結と同様の増減の傾向であり、1987年の24.28億円から1992年の62.08億円まで増加し、その後は減少して1996年の57.34億円になった。以上を分析期間全体で見れば1987年から1992年までの増加傾向と1993年以降の停滞状況の2つの構造が含まれる。従って、本来、1次式で表すことは不可能であるという条件付きの表記としての1次式である($y = 3.0x - 5,884$)。

個別営業利益でもこの傾向は同じであり、1987年から1992年までは連結とほぼ同額の直線的な右上がりの増加であったが、1993年以降は60億円近辺で留まっており、1993年を境にした2つの構造がある($y = 3.2x - 6,267$)。

連結営業利益のY値偏差は7.5であり、最終年度である1996年度の連結営業利益に対する比率は、12.7%である。個別営業利益のY値偏差は8.8であり、1996年度の個別営業利益に対する比率は、15.3%である。

連結R²は0.62であり、個別R²も0.57である。y式の信頼性は連結・個別共に高いとも低いとも言えない程度である。

以上から、西洋フードシステムズの営業利益は、連結・個別共に停滞の状況にあるが、長期的には緩やかな増加傾向にあると言える。

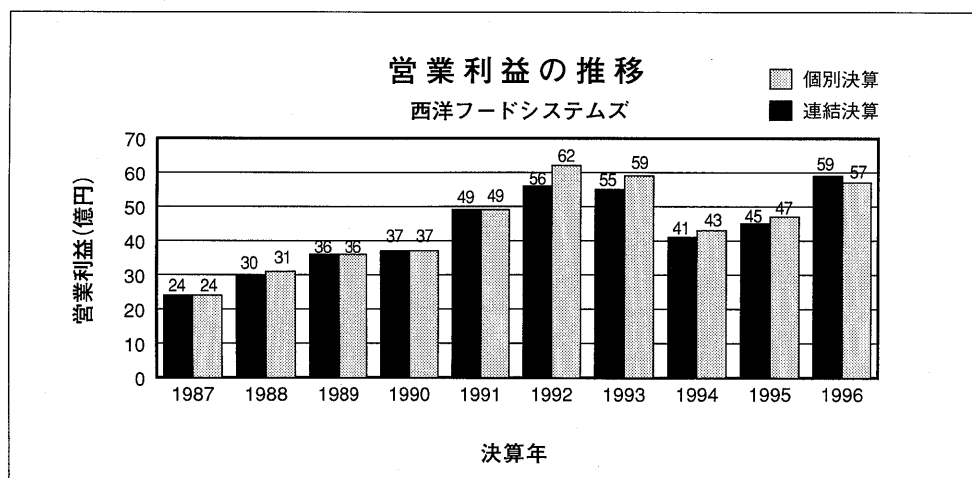


図6 西洋フードシステムズの営業利益の推移

(3) モスフードサービス

モスフードサービスの営業利益は、1994年から伸びが止まって伸率ゼロとなっ

てしまうものの、連結・個別共に順調である（図7）。1987年に14.31億円であった営業利益が1994年まで直線的に増加したが、1995年からほとんど停滞の状況となっている。モスフードサービスの連結営業利益には以上のように2つの傾向があるので、本来、1次式での表記は無理であるという条件付きの表記となる（ $y = 5.6x - 11,079$ ）。

個別営業利益でも連結と同じ条件付きの1次式の表記である（ $y = 5.7x - 11,286$ ）。連結営業利益のY値偏差は2.8であり、最終年度である1996年度の連結営業利益に対する比率は、4.4%である。個別営業利益のY値偏差は2.8であり、最終年度である1996年度の個別営業利益に対する比率も4.4%である。

連結R2と個別R2は共に0.98であるから、y式の信頼性は連結・個別共に非常に高い。

以上から、モスフードサービスの営業利益は、連結・個別共に順調に増加している。ただし、1994年以降に停滞している。

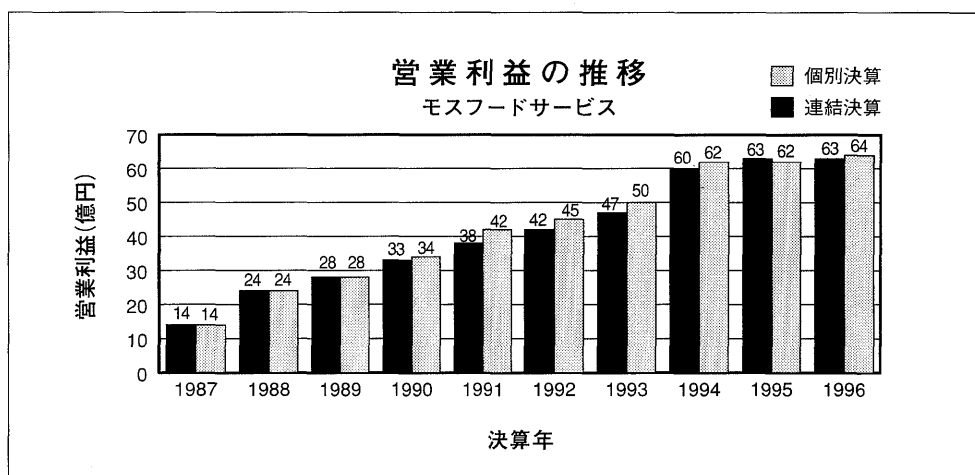


図7 モスフードサービスの営業利益の推移

(4) リンガーハット

リンガーハットの営業利益は、連結が長期趨勢としては、1987年の10.31億円から1996年の21.12億円まで増加している（図8）。ただし、1993年と1994年には大きく落込んでいるので趨勢は歪んでいることに注意する（ $y = 1.1x - 2,189$ ）。個別営業利益でも連結と同じ傾向であるが、数字の変動幅は連結よりも大きい（ $y = 0.5x - 1,014$ ）。

連結営業利益のY値偏差は2.8であり、最終年度である1996年度の連結営業利益に対する比率は13.3%である。個別営業利益のY値偏差も同じく2.8であり、1996年度の個別営業利益に対する比率は、17.7%である。

連結R²は0.62である。個別R²は0.26である。連結のy式の信頼性はややあるが、個別のy式は非常に低い。

以上から、リンガーハットの連結営業利益は長期的には増加傾向にあるが、1993年と1994年のような不安定な落込みが途中で見られることが特徴となっている。個別営業利益は1992年に15.45億円を達成して以来、同じ金額が続いているから、親会社は新規事業拡大等による収益源の増大を意識的に止めたことになる。

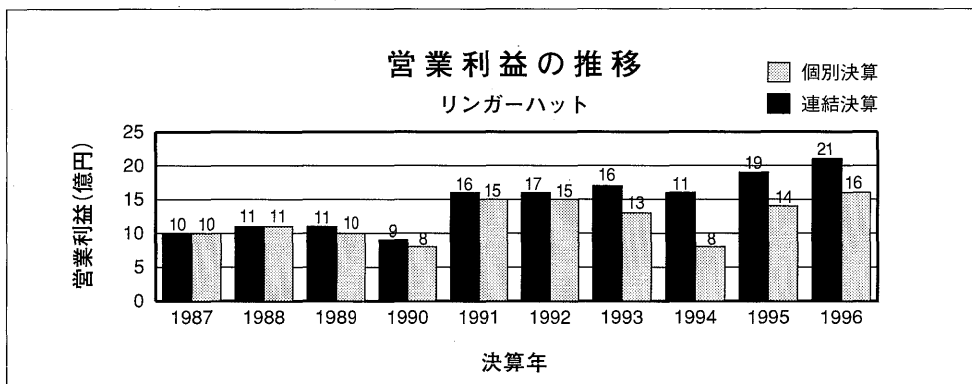


図8 リンガーハットの営業利益の推移

5. 経常利益の推移

(1) すかいらーく

すかいらーくの経常利益は、連結経常利益が1986年の108.47億円から1991年の157.57億円に向けて上昇していたが、同年を頂点として下降に転じて1996年で117.67億円となった(図9)。このような前半登り後半下りという2面性を持つ推移があるので1次式で表記するのは本来無理があるという条件付きの1次式となる($y = -0.3x + 696$)。個別では1986年の101.43億円から1991年の132.97億円まで上昇したがその後減少に転じ、1995年に83.01億円まで低下した。1次式で表記する困難性は連結の場合と同様である($y = -1.4x + 2,846$)。

連結経常利益のY値偏差は19.3であり、最終年度である1995年度の連結経常利益に対する比率は、14.5%である。個別経常利益のY値偏差は16.1であり、最終年度である1995年度の個別経常利益に対する比率は、19.4%である。いずれも、売上

高の際に得た優れたY値偏差があったにもかかわらず営業利益に対する営業外収益と営業外費用が悪化したことになる。

連結R²は0.00であり（正確には0.0022）、y式の信頼性は非常に低い。個別R²も0.07の低さであり、y式の信頼性は非常に低い。

以上から、すかいらーくの経常利益は、連結・個別共にどちらかと言えば下降気味であり、総合体力の観点から厳しい今後となっている。

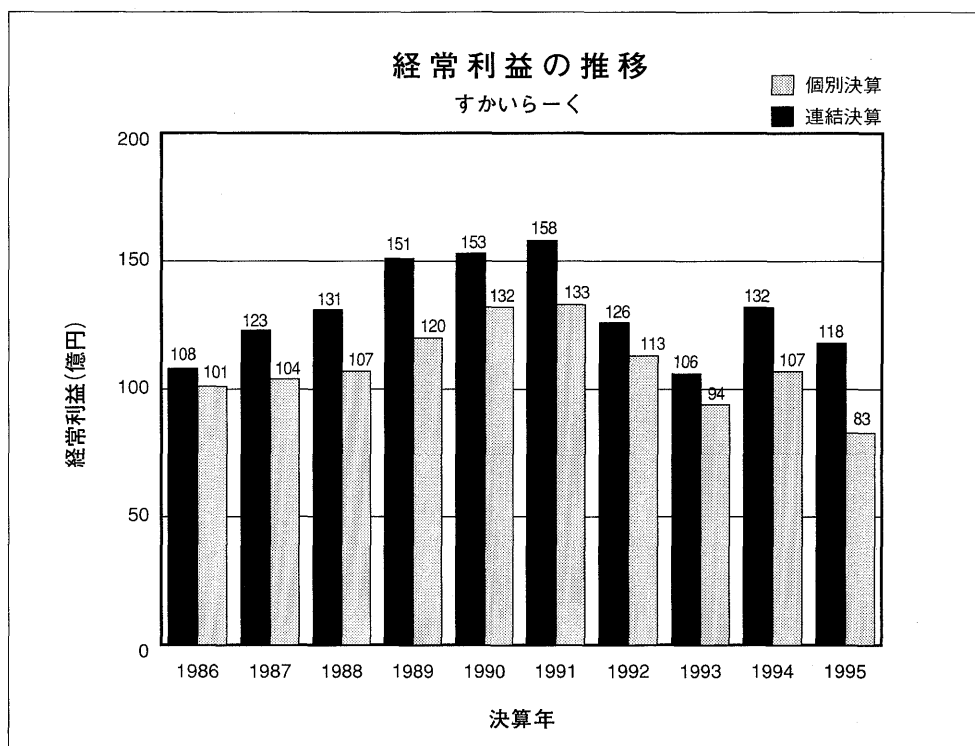


図9 すかいらーくの経常利益の推移

(2) 西洋フードシステムズ

西洋フードシステムズの経常利益は、連結では1987年の38.64億円から1992年の48.15億円まで増加し、その後は1994年の30.17億円への落ち込みを経て、1996年の40.90億円まで回復した（図10）。個別経常利益については連結と同様の増減の傾向ではあるが、1987年以来連結よりも個別の方が経常利益が多いという連結経営の観点から問題ある状況となっている。個別経常利益は1987年の38.50億円から1992年の53.58億円まで上昇したが、その後1994年の35.66億円から1996年の42.43

億円まで回復した。これら金額はいずれも1994年の5.71億円を始めとして個別の方が連結よりも大きい。

西洋フードシステムズの連結経常利益の推移は、1992年を頂上として上昇と下降と再上昇という3つの局面が含まれるために、本来、1次式で表すことは不可能であるという条件付きの1次式の表記である ($y = -0.9x + 1,916$)。個別経常利益でもこの傾向は同じであり、連結経常利形と同じ条件付きの1次式の表記である ($y = -0.4x + 822$)。

連結経常利益のY値偏差は6.4であり、最終年度である1996年度の連結経常利益に対する比率は、15.6%である。個別経常利益のY値偏差は6.3であり、1996年度の個別経常利益に対する比率は、14.8%である。

連結R²は0.18であり、個別R²も0.04である。y式の信頼性は連結・個別共に低い値であり、過去10年間の趨勢からは一定の傾向が出ない。

以上から、西洋フードシステムズの経常利益は、連結・個別共に停滞の状況にあるが、不安定の中の緩やかな上昇を継続させることが課題となっている。

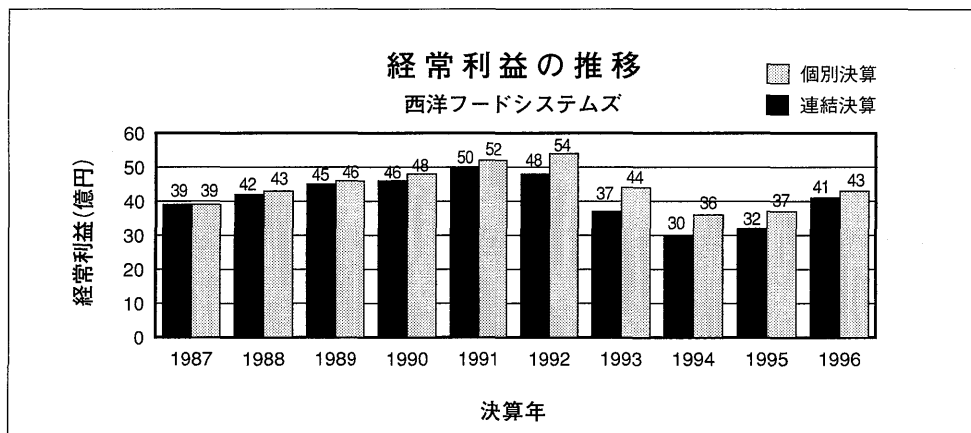


図10 西洋フードシステムズの経常利益の推移

(3) モスフードサービス

モスフードサービスの経常利益は、1994年と1995年の落込みを除くと順調な上昇となっている (図11)。1987年に18.16億円であった連結経常利益が1993年の若干の停滞を見せたものの1996年には68.26億円と10年間で376%の増加となっている。モスフードサービスの連結経常利益は1993年に46.89億円への落込みがあるものの、安定した1次式で表記できる ($y = 5.5x - 10,920$)。個別でも連結と同じ2面性があるが1次式で表すことは可能である ($y = 5.6x - 11,196$)。

連結経常利益のY値偏差は3.4であり、最終年度である1996年度の連結経常利益に対する比率は、5.0%である。個別経常利益のY値偏差は3.8であり、最終年度である1996年度の個別経常利益に対する比率も5.5%である。

連結R²と個別R²は共に0.96であるから、y式の信頼性は連結・個別共に非常に高い。

以上から、モスフードサービスの経常利益は、安定した傾向の下に連結・個別共に順調に増加している。

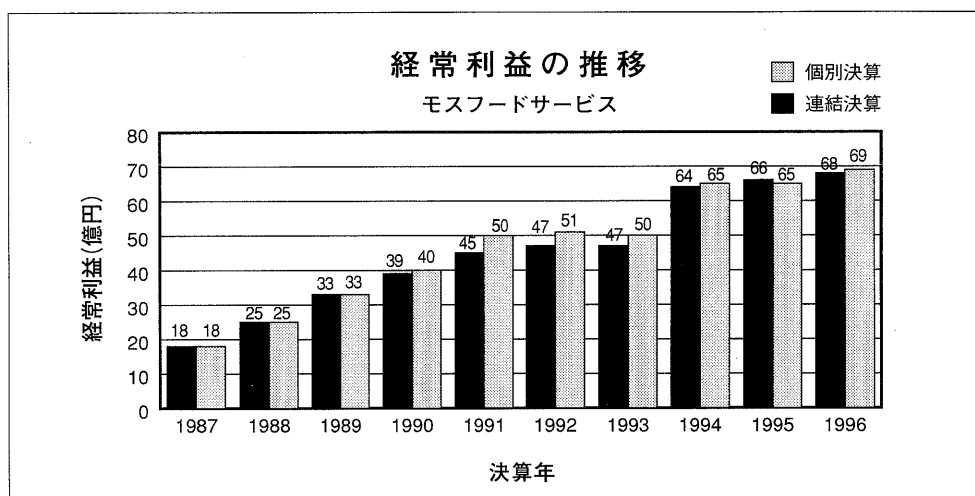


図11 モスフードサービスの経常利益の推移

(4) リンガーハット

リンガーハットの経常利益は、連結経常利益が長期趨勢として、1987年から1996年まで継続的に増加している（図12）。1987年に9.19億円であった経常利益が1994年の2.38億円への落込みを見たものの、1996年には13.45億円と回復している。この後半部のデータのために趨勢は歪んでいる（ $y = -0.2x + 362$ ）。個別経常利益でも連結と同じ傾向であるが、数字の変動幅は連結よりも大きい（ $y = 0.6x + 190,889$ ）。

連結Y値偏差は3.4であり、最終年度である1996年度の連結経常利益に対する比率は25.3%である。個別Y値偏差も同じく3.6であり、1996年度の個別経常利益に対する比率は、35.2%である。

連結R²は0.03である。個別R²は0.06である。連結・個別共に信頼性は非常に低いので、1次式は実質的に成立しない。1994年と1995年の異常値を外せば上昇基調が見られることになる。

以上から、リンガーハットの連結経常利益は長期的には増加傾向にあるが、1993年と1994年のような落込みが途中で見られるために不安定である。個別経常利益は1991年に12.01億円を達成して以来10億円近辺で安定しているから、親会社は財務構造として成長を止めたことになる。

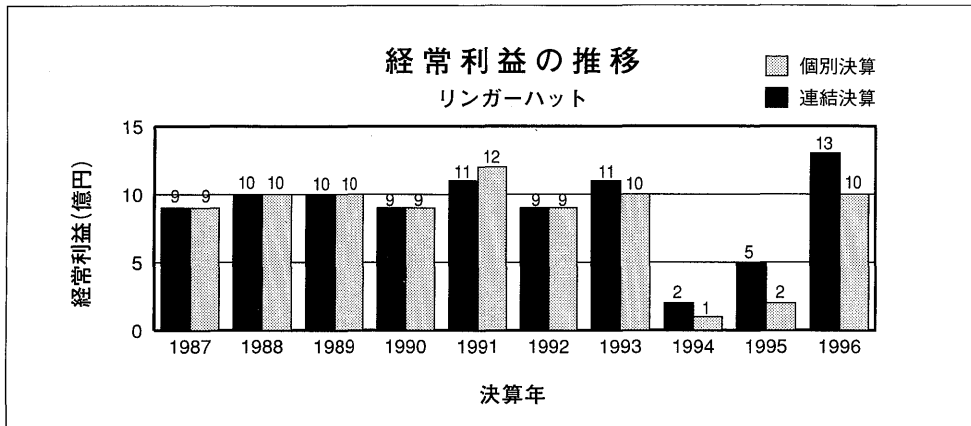


図12 リンガーハットの経常利益の推移

6. 固定資産の推移

(1) すかいらーく

すかいらーくの固定資産は、連結では順調に伸びが見られる（図13）。1986年に447.92億円であった固定資産がほぼ直線的に右上がりとなり1996年には1,521.13億円となっている（ $y = 114.13x - 226,268$ ）。個別では1986年から1992年までは増加を見ているが、1993年からはほとんど伸びが止まり、1,000億円近辺に留まっている（ $y = 79.1x - 156,750$ ）。

連結固定資産のY値偏差は54.8（単位億円，以下同じ）の狭さであり，最終年度である1995年度の連結固定資産に対する比率は，3.6％である。個別固定資産のY値偏差は35.2の狭さであり，最終年度である1995年度の個別固定資産に対する比率は，3.3％である。

R 2は連結・個別共に0.98であり，y式の信頼性は高いので，固定資産の増加傾向はこのまま続くことが予想される。

以上から，すかいらーくの連結固定資産は順調な増加傾向にあり，子会社を拡大しながらの事業展開を中心としていることが明らかとなった。しかし，個別固定資産は長期的にはわずかながらの増加傾向にあるとは言えるが，現状は停滞であるので，事業拡大の中心は親外しで子会社重点となっていることが分かる。

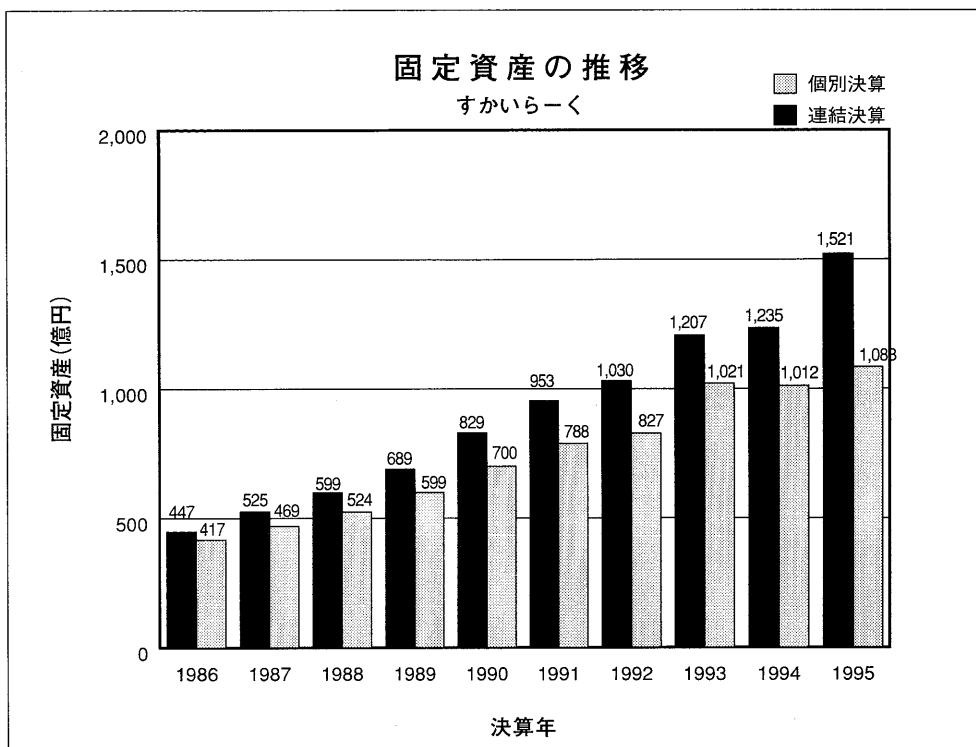


図13 すかいらーく固定資産の推移

(2) 西洋フードシステムズ

西洋フードシステムズの固定資産は、連結・個別共に順調な成長である。ただし、1993年を境として伸び率に変化が見られる（図14）。連結固定資産は、1987年に264.51億円であったが1996年には1,008.74億円となった。1993年以前にはやや急な伸び率であり、それ以降では緩やかな伸びとなっている（ $y = 84.0x - 166,621$ ）。個別固定資産でもこの傾向は同じであり、1987年から1993年までは連結とほぼ同様の増加であったが、1993年以降800億円程度で留まり、1996年には923.25億円となった（ $y = 41.5x - 81,808$ ）。

連結固定資産のY値偏差は59.9（単位億円，以下同じ）の狭さであり，最終年度である1996年度の連結固定資産に対する比率は，5.9％である。個別固定資産のY値偏差は58.8であり，1996年度の個別固定資産に対する比率は，6.4％である。

連結R²は0.95であり，個別R²も0.84の高さであるから，y式の信頼性は連結・個別共に高い。

以上から，西洋フードシステムズの固定資産は，連結・個別共に分析期間を通じて伸びのパターンは一定ではないが，長期的には緩やかな増加傾向にあると言える。

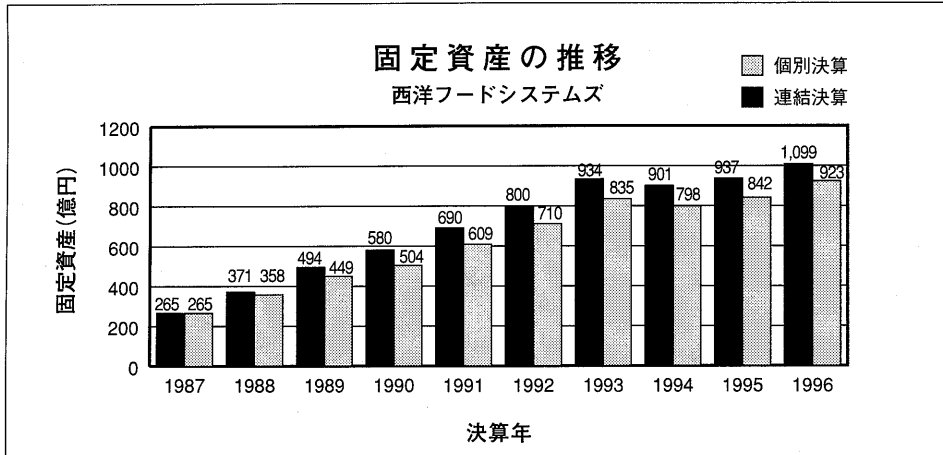


図14 西洋フードシステムズの固定資産の推移

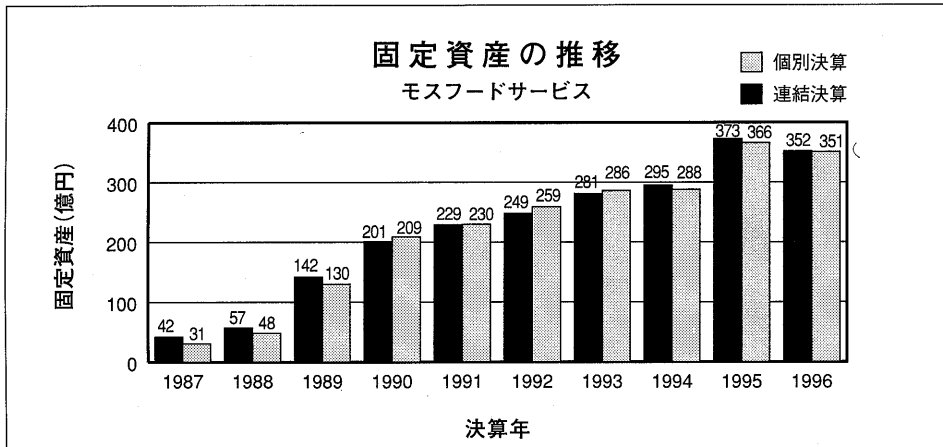


図15 モスフードサービスの固定資産の推移

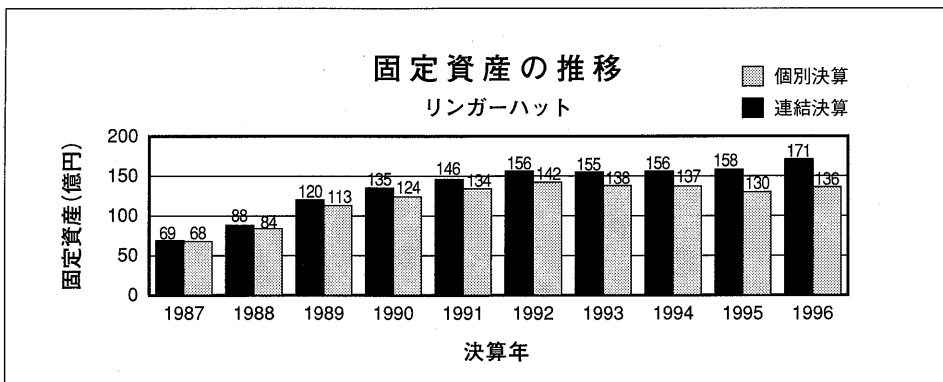


図16 リンガーハットの固定資産の推移

(3) モスフードサービス

モスフードサービスの固定資産は、連結・個別共に順調な伸びが見られる（図15）。1987年に41.76億円であった連結固定資産がほぼ直線的に右上がりとなり1996年には351.71億円となっている（ $y = 36.5x - 72,541$ ）。個別固定資産は1987年に31.09億円であったが1996年には351.02億円まで伸びた（ $y = 37.7x - 74,127$ ）。

連結固定資産のY値偏差は26.6の狭さであり、最終年度である1996年度の連結固定資産に対する比率は、7.5%である。個別固定資産のY値偏差は30.5の狭さであり、最終年度である1996年度の個別固定資産に対する比率は、8.7%である。

連結R²は0.95であり、また個別R²は0.94であるからy式の信頼性は連結・個別共に非常に高い。

以上から、他社が営業利益や経常利益の確保で苦しんでいる一方であえて固定資産の拡大に取り組んでいるにかかわらず、モスフードサービスの固定資産は、連結・個別共に順調に増加している。ただし、連結・個別共に1995年から1996年にかけて減少となっていることに注目したい。

(4) リンガーハット

リンガーハットの固定資産は、連結固定資産が1987年から1996年まで順調に伸びたが、1992年を境に変化している（図16）。連結固定資産が1987年の69.46億円から1996年の170.99億円まで順調に伸びたが、1992年の155.96億円の達成を境に伸びの態様は緩やかな増加へと変化している（ $y = 10.0x - 19,855$ ）。しかし、個別では1992年の142.12億円を境として140億円近辺で伸びが止まって規模拡大は子会社中心となっている（ $y = 6.7x - 13,148$ ）。

連結固定資産のY値偏差は14.4であり、最終年度である1996年度の連結固定資産に対する比率は8.4%である。個別固定資産のY値偏差は15.9であり、最終年度である1996年度の個別固定資産に対する比率は、11.7%である。

連結R²は0.83であり、個別R²は0.64である。y式の信頼性は連結では高いので順調な増加傾向と言えるが、個別では低いので伸びは一定した伸びとは言えない。

以上から、リンガーハットの連結固定資産は順調に増加している。しかし、個別固定資産は1992年を境に成長停止の状態となり、経営規模の拡大は子会社を中心となって行われている。

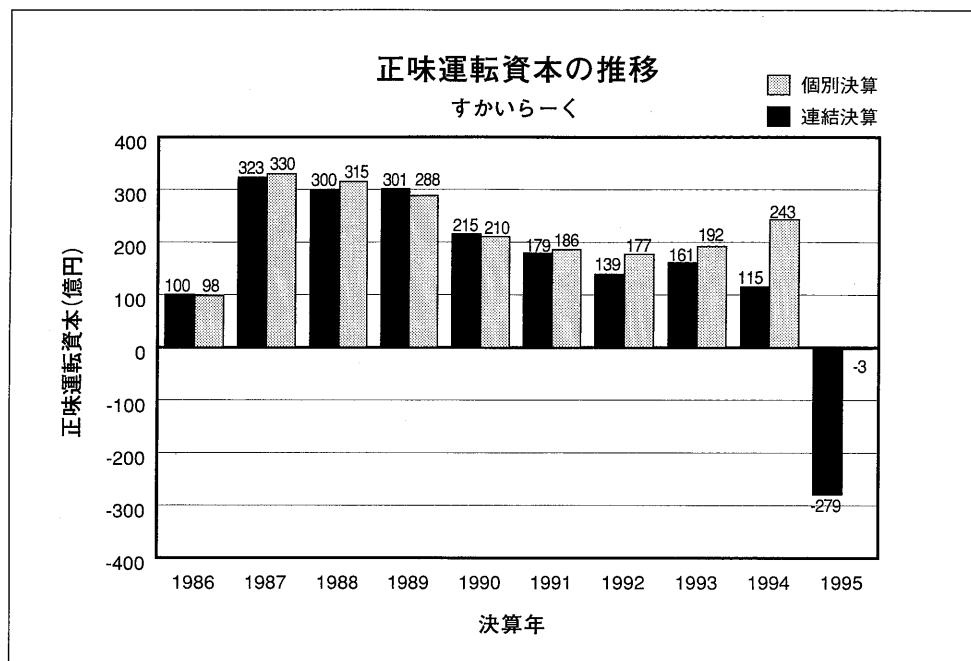


図17 すかいらーくの正味運転資本の推移

7. 正味運転資本の推移

(1) すかいらーく

すかいらーくの正味運転資本は、連結正味運転資本は1986年から1994年に向けて徐々に下降していたが、1995年にはマイナスに転じ、苦しい資金繰りとなった(図17)。1986年の99.58億円から1997年には322.65億円へと急上昇した後、1994年の115.28億円に向けて徐々に下降していたが、1995年には急に－278.84億円へとマイナスに転じた ($y = -36.8x + 73,436$)。個別正味運転資本は1986年の88.27億円から1987年の329.96億円まで上昇したがその後減少に転じ、1992年に176.55億円近辺まで低下し、その後少々の持ち直しがあったものの1995年には－3.22億円とマイナスとなった ($y = 145.6x + 29,178$)。

連結正味運転資本のY値偏差は139.6であり、最終年度である1995年度の連結正味運転資本に対する比率は、50.1%である。個別正味運転資本のY値偏差は980.2であり、最終年度である1995年度の個別正味運転資本に対する比率は、32,673%である。いずれも、売上高の際に得た優れたY値偏差があったにもかかわらず正味運転資本では悪化したための結果であり、すかいらーくの資金繰りは、かなり悪化した状況にあることになる。

このY値偏差は幅が大きすぎるので、一時的でかつ大きな振れに影響されている

ことが原因とは思えるが、この悪化を示す趨勢から見る限り、すかいらーくは資金繰りの悪化に陥っている。

連結R²は0.42であり、y式の信頼性は非常に低い。個別R²も0.19の低さであり、y式の信頼性は非常に低いので、このまま悪い資金繰りが続くことはないが、資金繰りは趨勢的に低下しているので構造的な問題が発生していることになる。

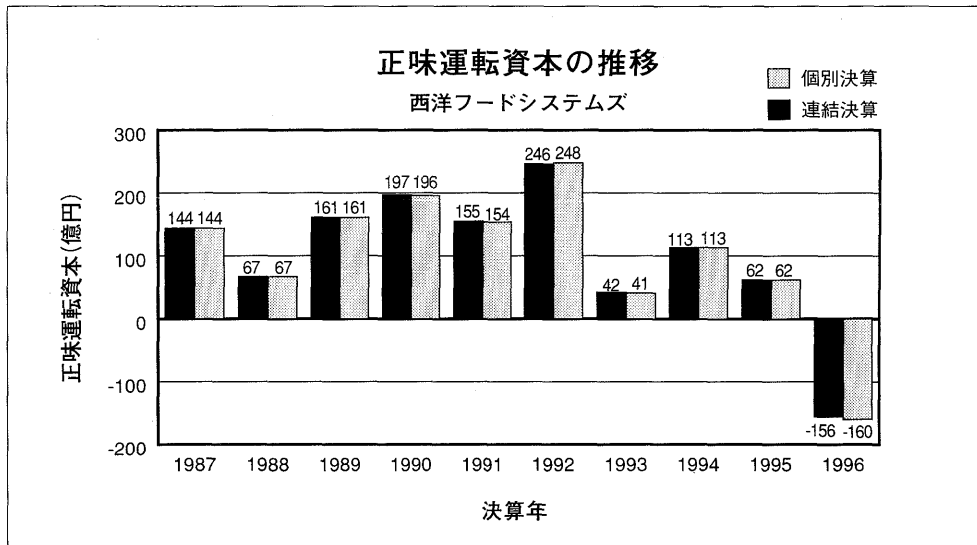


図18 西洋フードシステムズの正味運転資本の推移

(2) 西洋フードシステムズ

西洋フードシステムズの正味運転資本は、連結・個別共にほとんど同額の正味運転資本で推移している。1987年から1992年までは上昇を見せたものの、その後は下降を続けて遂には1996年にはマイナスとなり、苦しい資金繰りの状況である(図18)。連結正味運転資本は1987年の143.91億円から1992年の245.87億円まで増加し、その後は1994年に112.90億円へと持ち直したものの、1996年の－156.08億円まで減少した。

個別正味運転資本についても同様であり、1987年の144.22億円から1992年の244.70億円まで増加し、その後は1994年に112.64億円へと持ち直したものの、1996年の－160.11億円となった。以上を分析期間全体で見れば1987年から1992年までの増加傾向と1993年以降の下降との2つの構造が含まれているので、本来、1次式で表すことは不可能であるという条件付きでの1次式の表記である($y = -20.3x + 40,517$)。個別正味運転資本でもこの傾向は同じであり、連結正味運転資本

と同様の条件付きの1次式の表記である ($y = -20.5x + 40,993$)。

連結正味運転資本のY値偏差は98.1であり、最終年度である1996年度の連結正味運転資本に対する比率は、62.9%である。個別正味運転資本のY値偏差は99.2であり、1996年度の個別正味運転資本に対する比率は、62.0%である。

連結R²は0.62であり、個別R²も0.57である。y式の信頼性は連結・個別共に低いのでここで得たy式の信頼性は低い。従ってここで1次式による回帰値は分析期間全体を前提とする限り使えない。

以上から、西洋フードシステムズの正味運転資本は、1993年以降の変化により、連結・個別共に悪い資金繰りの状況となり、長期的にも正味運転資本は低下傾向にある。

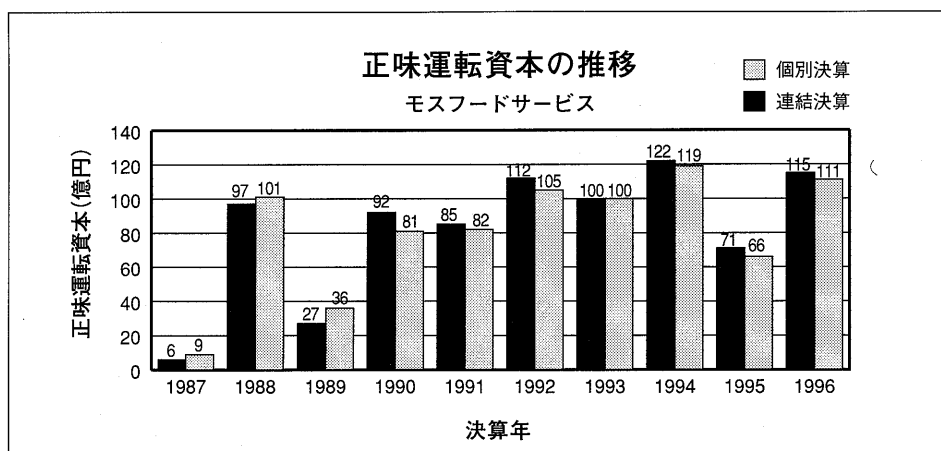


図19 モスフードサービスの正味運転資本の推移

(3) モスフードサービス

モスフードサービスの正味運転資本は、連結・個別共に正味運転資本が1988年に97.31億円になった後、1994年に至るまで全体的には1996年まで上昇を示している(図19)。1987年の連結正味運転資本は5.95億円であったが1988年に97.31億円に急上昇した後、1994年に122.35億円のピークを付け、宇余曲折という程の一定しない伸びを経て、1996年に114.83億円を示しつつ全体的に上昇している ($y = 8.0x - 15,906$)。個別でも連結でもデータ上のばらつきがあり一定した傾向を特定できない ($y = 7.1x - 14,040$)。

連結正味運転資本のY値偏差は31.2であり、最終年度である1996年度の連結正味運転資本に対する比率は、27.2%である。個別正味運転資本のY値偏差は29.5で

あり、最終年度である1996年度の個別正味運転資本に対する比率も26.6%である。

連結R²は0.41であり、個別R²は0.37であるから、y式の信頼性は連結・個別共に非常に低い。

以上から、モスフードサービスの正味運転資本は、連結・個別共に全体的には上昇しているが、上昇のペースが一定していないためにこのままの傾向で今後も推移するかは不明である。この乱れたデータのばらつきはモスフードサービスの資金繰りの不安定さを示していることにもなり、資金繰りの安定化が今後の課題となる。

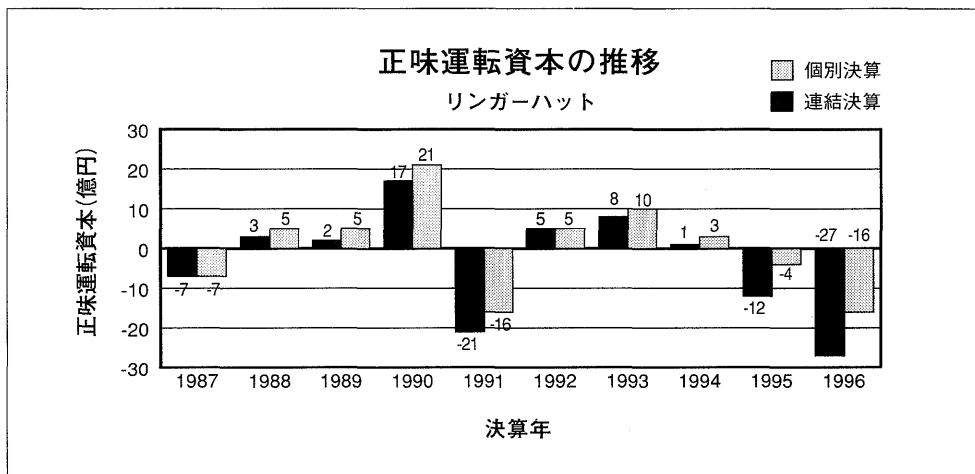


図20 リンガーハットの正味運転資本の推移

(4) リンガーハット

リンガーハットの正味運転資本は、連結正味運転資本では1987年の－7.35億円から1990年の17.32億円に向けて上昇した後、1995年にはマイナスに転じ、1996年には－27.13億円となり、苦しい資金繰りを示した（図20）。1987年の－7.35億円から1990年の17.32億円に向けて上昇した後、1995年にはマイナスに転じ、1996年には－27.13億円となり、苦しい資金繰りを示した（ $y = -1.8x + 3,484$ ）。個別正味運転資本は1986年の90.15億円から1991年の104.27億円まで上昇したがその後減少に転じ、1995年に68.04億円近辺まで低下した（ $y = 1.0x + 1,909$ ）。

連結正味運転資本のY値偏差は1.5であり、最終年度である1995年度の連結正味運転資本に対する比率は、5.5%である。個別正味運転資本のY値偏差は11.7であり、最終年度である1995年度の個別正味運転資本に対する比率は、363.4%である。いずれも、売上高の際に得た優れたY値偏差にかかわらず正味運転資本は悪化している。このY値偏差は幅が大きすぎるのでこの悪化の傾向が今後の傾向として定着

するとは言えないが、この趨勢から見る限り、リンガーハットは資金繰りの悪化に陥っている。

連結R2は0.15であり、y式の信頼性は非常に低い。個別R2も0.06の低さであり、y式の信頼性は非常に低いので、このまま悪い資金繰りが続くことはないが、資金繰りは趨勢的に低下しているので構造的な問題解決が必要となる。

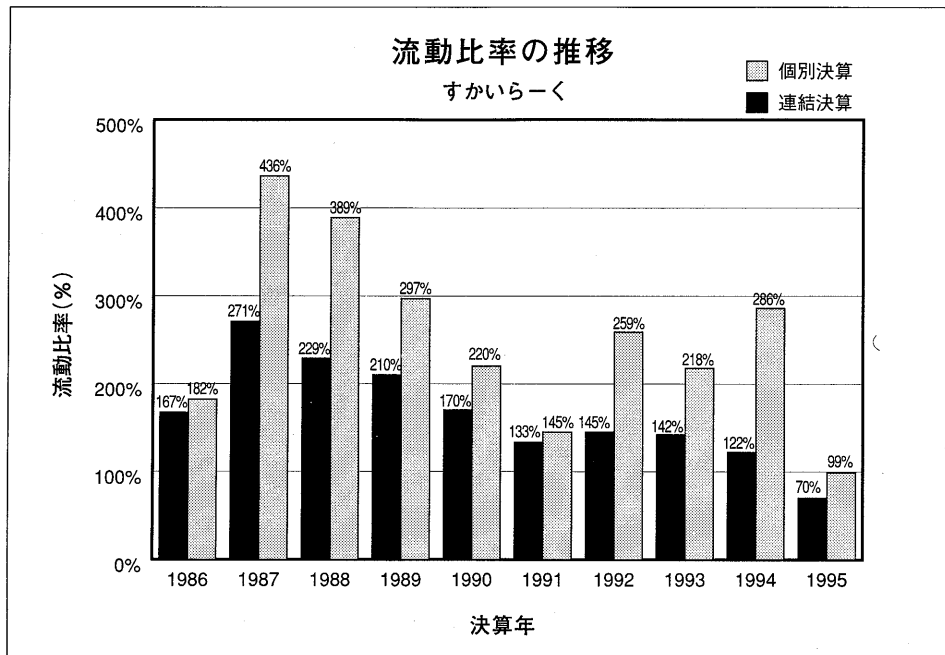


図21 すかいらーくの正味運転資本の推移

8. 流動比率の推移

(1) すかいらーく

すかいらーくの流動比率は、連結流動比率は1986年から1992年には上昇して資金繰りの順調さを示していたが、1993年以降継続的に下降をたどり、ついに1995年で100%を切る所となり、資金繰りの観点からは最悪の事態となった(図21)。1986年には167%であったにもかかわらず1992年には271%に上昇して資金繰りの順調さを示していたが、その後継続的に下降をたどり、ついに1995年で100%を切る所となり、70%と最悪の事態となった($y = -15x + 31,290$: 単位は%)。

このy式から、最近のすかいらーくの連結資金繰りは年当たり15%ずつ悪化していることになる。個別流動比率は1986年の182%から1987年の436%まで急上昇し

たがその後減少に転じ、1995年には連結同様に100%を切り、99%まで低下した($y = -17.2x + 34,526$: 単位は%)。

個別流動比率は連結よりも値は全体的に良いが、1987年から1991年にかけての落込みが激しく、1995年になって100%割れが生じた。この状況から、y式からの値より年間17%ずつ個別流動比率が悪化していることになる。

連結の流動比率のY値偏差は35%であり、最終年度である1995年度の連結流動比率に対する比率は、11.2%である。個別流動比率のY値偏差は95%であり、最終年度である1995年度の個別流動比率に対する比率は、27.5%である。いずれも、売上高の際に得た優れたY値偏差があったにもかかわらず売上高に対する売上原価と販売費および一般管理費が悪化した。

連結R²は0.67であり、y式の信頼性はやや高い。個別R²は0.25の低さであり、y式の信頼性は非常に低い。

以上から、すかいらーくの流動比率は、連結・個別共に明らかな下降傾向にある。連結流動比率は一定したペースでの下降であり、最悪ラインを割り込んだ。個別流動比率のy式の信頼性は低く、データの乱高下があったことを含んだとしても、連結決算同様の資金繰りの悪化となっている。

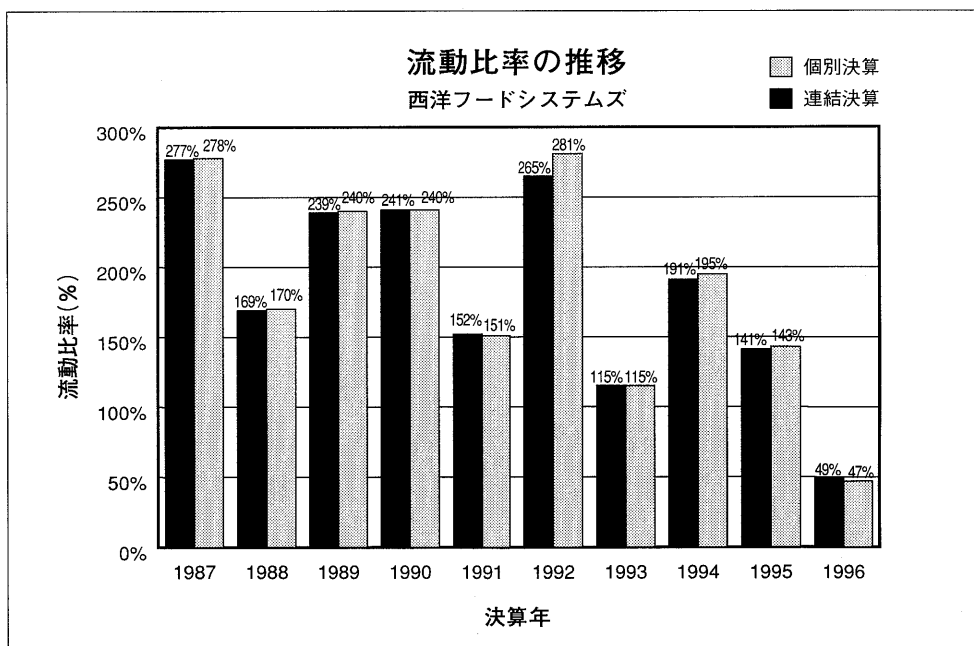


図22 西洋フードシステムズの流動比率の推移

(2) 西洋フードシステムズ

西洋フードシステムズの流動比率は、連結・個別共に流動比率はほとんど同じ値である。西洋フードシステムズの流動比率は1987年から下降傾向の推移となっており、悪化が続き、ついには1996年には100%を割り込んだ（図22）。1987年には277%という優秀さであったが、その後上下を繰り返した後に1992年に265%となったが、改善はせず、以来悪化を続けて1996年には100%を割り込み49%となった（ $y = -17x + 33,412$ ：単位は%）。個別流動比率でもこの傾向は同じであり、1987年から1992年までは連結流動比率とほぼ同額の直線的な右上がりの増加であったが、1993年以降は60億円近辺で留まっている（ $y = -16.6x - 33,269$ ：単位は%）。

連結流動比率のY値偏差は55%であり、最終年度である1996年度の連結流動比率に対する比率は、112%である。個別流動比率のY値偏差は64.8であり、1996年度の個別流動比率に対する比率は、137.9%である。

連結R²は0.48であり、個別R²も0.44である。y式の信頼性は連結・個別共に低いと言えるが結果から見れば楽観はできない。

以上から、西洋フードシステムズの流動比率は、連結・個別共に下降傾向であり、短期的には危険な資金繰りの状況にある。

(3) モスフードサービス

モスフードサービスの流動比率は、連結・個別共にほとんど同じ値で推移しており、1988年に機動的に経営ができる中小企業の規模位でしか達成できない優秀な値を見せた後、やや下降気味となり、1996年には200%程度を保っている。同社としては以前から比較すれば下降ではあるが、優秀な資金繰りの経営であることを示している（図23）。

連結・個別共にほとんど同じ値で推移しており、1987年に116%であったが1988年には295%となり、その後緩やかな下降傾向を示しており、1996年には204%となっている。下降とはいっても前述2社の下降とは異なり、最悪の流動比率であっても1987年の116%と1989年の143%であり、いずれも資金繰りの観点からは安全圏内である。固定資産が連結・個別共に急拡大をしていない代わりに資金繰りは健全であり、バブル景気に浮れなかったモスフードサービスの堅実さが明らかとなっている（ $y = -1.5x - 2,721$ ：単位は%）。個別流動比率も連結とほとんど同じ値でありわずかの違いしかない（ $y = -5x + 10,163$ ：単位は%）。

連結流動比率のY値偏差は53であり、最終年度である1996年度の連結流動比率に対する比率は、26.0%である。個別流動比率のY値偏差は64であり、最終年度である1996年度の個別流動比率に対する比率も50.8%である。

連結R²共に0.01と個別R²は0.06であるから、y式の信頼性は連結・個別共に

非常に低い。

以上から、モスフードサービスの流動比率は、連結・個別共に順調であり、バブル期以降でも資金繰りにはまったく困らない優秀な経営管理の様を見せている。ただし、データの散らばりの範囲が広いために、y式の値の信頼性は低い。Y値偏差は1987年と1989年の両年の落込みの影響が大きい。

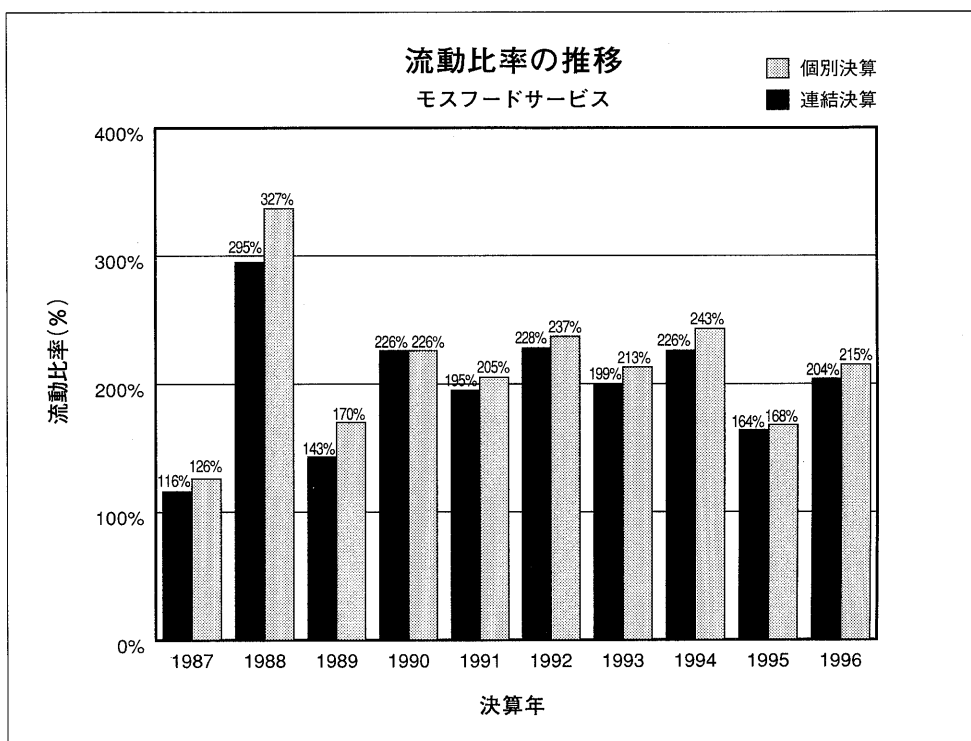


図23 モスフードサービスの流動比率の推移

(4) リンガーハット

リンガーハットの流動比率は、連結・個別共に流動比率は下降傾向となっており、1987年から1990年まで上昇した後、以降は下降の傾向となり、1995年には100%を割り込み、資金繰りの上で危険な状況に陥っていることが明らかとなっている（図24）。連結の流動比率が1987年の82%から1990年の134%まで上昇した後、以降は下降の傾向となり、1994年には100%を割り込み78%に落込み、引き続いて1996年には更に資金繰りが悪化して54%となり、危険な状況に陥っていることが明らかとなった（ $y = -3x + 6,240$ ：単位は%）。個別流動比率も連結とほとんど同じ傾

向であり、毎年3%ずつ流動比率が悪化していることを示している ($y = -3x - 5,377$: 単位は%)。

連結Y値偏差は22であり、最終年度である1996年度の連結流動比率に対する比率は40.7%である。個別Y値偏差も同じく26であり、1996年度の個別流動比率に対する比率は、42.6%である。

連結R2は0.17である。個別R2は0.10である。連結・個別共に信頼性は低いが、1987年と1991年の落込みが影響しているためであり、リンガーハットの連結流動比率は長期的にも短期的にも下降傾向であり、1994年以降は特に危険な状況である。個別流動比率も連結と大差はない。1990年の個別流動比率の値が連結よりも大きいためにY値の偏差が大きくなったが、リンガーハットは連結・個別共に危険な資金繰りの状況にある。

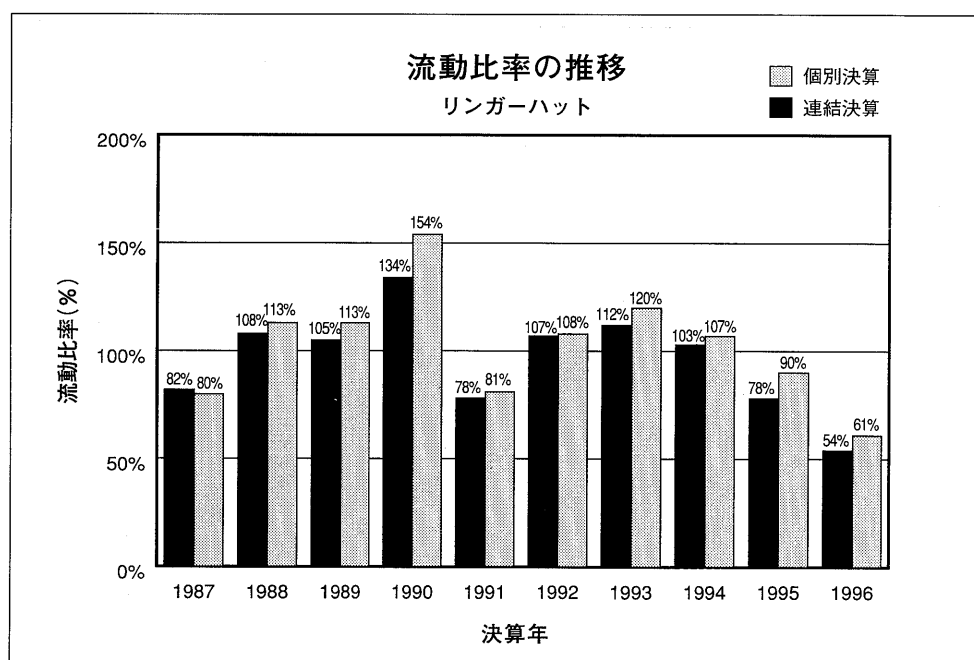


図24 リンガーハットの流動比率の推移

9. 会社別の分析結果

(1) すかいらーく

すかいらーくは、連結売上高が順調に上昇して1995年には2,470億円に達しているにかかわらず、本体の売上高を示す個別売上高は1991年以来ほとんど1,400億円近辺で留まっている。親会社の事業は守りの体制として現状維持を計り、子会社を中心として事業の拡大を計ろうとする連結経営のパターンの一つを示している。しかし、この売上高の上昇と同じ傾向で推移するのは固定資産のみであり、営業利益は連結・個別共に1991年の連結137.34億円、個別104.27億円を頂点として停滞している。経常利益も同様であり、1991年連結157.57億円、個別132.97億円を頂点として下降している。1995年の売上高営業利益率は連結4.6%、個別5.0%であり、売上高の伸び以上にコストの伸びが大きいことになる。同年の売上高経常利益率は連結4.8%、個別6.1%であり、状況の厳しさを考えれば良い結果である。売上は伸びてもさほど利益が出ない経営体質が1993年以来定着してしまっている。

1995年の総資本回転率は連結1.12、個別0.97%であり、固定資産回転率は連結1.62、個別1.26であるから、良い状況にある。

しかし、長期的には無理に経営規模を拡大しており、その結果は資金繰りに現れる。正味運転資本は1987年の連結322.65億円、個別329.96億円となり、1987年を頂点として下降の一途をたどり、ついには、1995年には連結-278.84億円、個別-3.22億円という危険な領域に入った。ちなみに同1995年の流動比率は、連結70%、個別99%である。メーカーのように手形取引が多ければ、資金繰りに窮して倒産に追い込まれるラインである。

以上のように問題を多々抱えてはいるが、すかいらーくがフードサービス業界のトップ企業であることに変わりはなく、それだけにこの厳しい情勢の下での注目度は他社よりもはるかに大きい。同社の売上原価、販売費および一般管理費、ならびに営業外費用の3段階のコストについて、全体的なコスト構造の解明が待たれる。特に、1993年以降が焦点となる。

(2) 西洋フードシステムズ

西洋フードシステムズは連結と個別の売上高が大差ない額であり、連結経営を始めた理由が不明である。ただし、伸びは順調であり、1996年には連結975.68億円、個別919.94億円となっている。この売上高の上昇を支える店舗等を示す固定資産も一定した伸びであり、1996年には連結351.71億円、個別923.25億円となっている。総資本回転率は、1996年では、連結0.84、個別0.86である。同年の固定資産回転率は連結0.97、個別1.00である。いずれにしても、設備に見合う売上高が達成できて

いないことを示しており、営業的には改善を要するラインである。

営業利益は、1996年の連結59.14億円、個別57.34億円を頂点として増加している。西洋フードシステムズは現場での売上とコストとの関係はよいことが分かる。売上高営業利益率は、1996年では連結6.0%、個別6.2%である。しかし、経常利益は、1992年に連結50.01億円、1992年に個別42.43億円を頂点として下降している。売上高経常利益率は、1996年では連結4.2%、個別4.6%である。売上は伸びても利益が出ない経営体質が1992年以来定着しているようである。これは、営業外費用が関係するものであり、資金繰りにも悪い影響が出る。

このように売上高と営業利益は増加しているが、経常利益の悪化は、正味運転資本は1996年の連結－156.06億円、個別－160.11億円となり、危険な領域に入っている。ちなみに同年の流動比率は、連結49%、個別47%である。すかいらーくと同じように、業種が違えば資金繰りに窮して倒産に追い込まれるラインである。

(3) モスフードサービス

モスフードサービスは、1996年の売上高である連結641.55億円、個別594.26億円を頂点として順調に上昇している。バブル期ピーク時の頃の1991年と1992年には急上昇がないが、その後も順調に伸びていることは、経営者の優秀さを示すものである。ただし、連結と個別との売上高の差はほとんどなく、連結経営の実施理由は不明である。この売上高の上昇を支える固定資産の推移は、1995年の連結372.59億円、個別351.02億円である。1996年での総資本回転率は1.09、固定資産回転率は1.06であり、フードサービス業界としては優秀である。3.0近辺が平均となっている自動車・電気機器の優良企業と比較すれば問題である。

営業利益は連結・個別共に1996年の連結63.14億円、個別63.94億円を頂点として上昇しており、現場の店舗レベルの経営は優秀である。同年の売上高営業利益率は連結9.8%、個別10.8%であり、本来、薄利多売でしか成立しない営業体制であるにもかかわらず、この業績は優秀である。経常利益も同様であり、1996年には連結68.26億円、個別63.94億円を頂点として増加の一途となっている。1996年の売上高経常利益率は連結10.5%、個別11.6%であり、順調な売上高の増加の上で資金繰りにも巧みに経営していることが明らかである。売上も設備も、そして利益も共に伸びるということが現実に示されている。

このような優秀さは資金繰りにも現れるものであり、正味運転資本は1994年のピークの額と比べれば8億円程少ないものの、1996年には連結114.83億円、個別110.8億円という優秀さである。他の3社が1995年（すかいらーく以外は1996年）にはマイナスとなり危険ラインに入ったことと比べればその優秀さが明らかである。ちなみに流動比率は、1996年で連結204%、個別126%であり、ここでも他の

3社よりはるかに優れた資金繰りであることが証明されている。

モスフードサービスの優れた経営は、バブルの頃には無理な拡大や急成長を行わず、また、昨今の厳しい環境の時期には資金繰りがマイナスに陥らないという理想的な姿となっている。

(4) リンガーハット

リンガーハットは、連結売上高が順調に上昇して1996年には275.08億円に達しているにもかかわらず、本体の売上高を示す個別売上高は1992年以来ほとんど200億円近辺で留まっている。親会社の事業は守りの体制として、子会社を中心として事業の拡大を計ろうとしている。しかし、この売上高の上昇と同じ傾向で推移するのは固定資産のみであり、1995年には連結170.99億円、個別135.51億円となった。1996年の総資本回転率は連結1.34、個別1.23である。同年の固定資産回転率は連結1.61、個別1.46である。この回転率の値からはリンガーハットの店舗の運用は効率的である。

営業利益は連結・個別共に1996年の連結21.12億円、個別15.84億円を頂点として徐々に増加しているが1993年や1994年のように落込みもあり、不安定である。1996年の売上高営業利益率は連結4.7%、個別5.1%である。率の値はよくないが、ほとぼりの利益率を確保している。経常利益も同様に1996年連結13.45億円、個別10.23億円を頂点として上昇はしてはいるものの1994年と1995年の落込みは同社の不安定さを示している。ただし、売上高経常利益率は連結4.7%、個別5.2%である。ここでも十分とは言えないものの、ほとぼりの利益の確保をしていることが明らかとなっている。

1996年には連結経常利益が個別経常利益の約1.3倍あるので、連結経営は成果をあげている。

このように一見順調そうに見えるが、資金繰りは苦しく、正味運転資本はマイナスとプラスを往復するという状況が続いている。その傾向の中で、全体的には下降傾向であり、悪化の一途である。1996年には、連結-27.13億円、個別-16.06億円と悪くなり、メーカー等ならば倒産となるラインである。これは流動比率についても言えることであり、1990年の連結134%、個別154%を頂点として下降し、1996年には連結54%、個別61%となっている。いずれにしても最悪の経営状況となっていることが裏付けられている。

以上のようにリンガーハットは資金繰りに深刻な問題を抱えており、連結経営のメリットは出ておらず、むしろ、個別の方が悪い数値が少ない、という消極的な健全性が目立つ。

10. まとめ

すかいらーくは、業界の雄であるが、作今の経営環境の厳しさには苦勞している。西洋フードシステムズおよびリンガーハットも同様である。この中でモスフードサービスが優秀な経営結果を示していることは注目される。

連結経営を上手に行っているのはすかいらーくであり、個別ベースでは売上高の伸びが止まっているのに、連結ベースでは上昇している。ただし、資金繰りでは連結の方が経営拡大の無理が出たのか悪化の度合いが大きい。この逆になぜ子会社を作って連結経営を行っているのかまったく不明なのが西洋フードシステムズとモスフードサービスである。両社は売上高が連結と個別が大差なく、財務諸表の数字の上からは連結経営の必然性は見られない。

管理会計の常識では、正味運転資本がマイナスとなること、すなわち流動比率が100%を割り込むと資金繰りが悪化している証拠となる。この状態に陥った企業は、倒産の危険ラインにあると言われている。しかし、すかいらーく、西洋フードシステムズおよびリンガーハットにその兆候はない。このような建設業、機械製造業または流通業には備わっていないが、フードサービス業ならでは備わっているというメカニズムがあればその解明が待たれる。これは管理会計、特に資金管理上の課題である。

資金繰りが他産業の倒産ラインに達していても存続できている状況は、原勉＝稲垣勉両教授が次のようにヒントを与えている[原勉＝稲垣勉，1997年，p.22]。

「飲食需要は最終消費者によるものが大部分を占めるため、売掛金の少ないいわゆる”日銭商売”として、資金効率はきわめて高い。また設備投資に多くを必要としないことも、資金効率を高める要因として、フードサービスの魅力のひとつである。」

バブルの頃には突出せず、バブル以降には財政状態は悪化せず、経営成績は落込まないということを可能にした経営方針がモスフードサービスの成功の源となっている。これが何に由来するのかも解明すべき課題である。根本的には、故桜田誓会長の経営哲学であろうが、更に細部にわたる解明の必要がある。

参考文献

1. 国友隆一著『よくわかる外食産業』日本実業出版社，1997年10月
2. 鴻野日出男著『外食産業を裸にする』KKベストブックス，1994年7月
3. 原勉＝稲垣勉著『フードサービス産業界』教育社，1997年1月

注

当研究は、中部大学産業経済研究所第1プロジェクトの研究費により実施した。

1. (社)日本フードサービス協会編『外食産業データハンドブック』p.1, (社)日本フードサービス協会, 1997.
2. 東洋経済新報編『会社四季報1998年第1集』, 東洋経済新報社, 1998年1月.
同誌において、事業の第1位が料理・喫茶または外食とされている会社をフードサービス業とすれば、木曽路(8160)、サト(8163)、西洋フードシステムズ(8176)、ロイヤル(8179)、すかいらく(8180)、東天紅(8181)、デニーズジャパン(8195)、リンガーハット(8200)、テンアライド(8207)、フレンドリー(8209)、フォルクス(8216)、サッポロライオン(8240)、藍屋(8286)の13社が小売業として計算されているに過ぎない(カッコ内は証券コード)。
3. フードサービス産業の研究を目的とする日本フードサービス学会は、奥住正道氏を会長として平成7年1月に発足した。平成10(1998)年1月24日(第3回日本フードサービス学会年次大会当日)現在、132個人会員と174法人会員の計306会員である。
4. 分析対象会社に関する付記事項は、次のとおりである。
 - ア 社名は、集計最終年度の連結売上高の降順記載である。
 - イ 利用したデータベースは、(財)日本経済研究所が提供している『企業財務データバンク』であり、平成9年9月5日購入分である。このデータベースの金額単位は百万円であるために、当稿における金額表示はxx.xx億円となっている。また、このデータベースの概要は当稿巻末の資料1に、操作方法は同資料2に計算した。
 - ウ 国友隆一氏による「外食産業売上高ランキング100社」によれば、日本マクドナルド第1位、ほっかほっか亭総本部第2位に続き、すかいらく第3位、モスフードサービス第5位、西洋フードシステムズ第10位、リンガーハット第71位である[国友, 1997, p.107]。
5. 連結財務諸表のデータから得た、 x 係数、 Y 切片、 Y 値の標準偏差、 R^2 乗値は、それぞれ、連結 x 係数、連結 Y 切片、連結 Y 値偏差、連結 R^2 と称することがある。これらに対して個別決算に関するものは、個別を冠する場合がある。
6. 連結財務諸表のデータから得た売上高、営業利益、経常利益、固定資産、正味運転資本、流動比率は、それぞれ、連結売上高、連結営業利益、連結経常利益、連結固定資産、連結正味運転資本、連結流動比率としている。これに対して個別決算に関するものは、個別を冠することがある。

資料1.『企業財務データバンク』の概要

本年に入り、(財)日本経済研究所は、日本開発銀行が構築した企業財務のデータベースを学術目的の利用に限り、有料で公開した。名称は、『企業財務データバンク』であり、CD-ROMのメディアにより提供されている。CD-ROMは、個別決算の部と連結決算の部に分かれ、別個に提供される。

ここに収録されている会社は、東京・大阪・名古屋の1部または2部に上場されている、金融・保険を除く全社である。連結決算の部については、連結決算を実施して連結財務諸表を作成している1,639社である。収録の開始が昭和53年であるが、その時点で連結決算を実施していない場合は、実施年度分からの収録となる。収録の1年度分を1レコードとするために、収録会社数に収録全年数を乗じて、 $1,639 \text{社} \times 20 \text{年} = 32,780 \text{(レコード)}$ とはならず、19,350レコードの収録数となっている。連結決算のデータ項目は、連結貸借対照表(97項目)、連結損益計算書および連結剰余金計算書(43項目)が計140項目であり、他に社名、コード、連結決算基準等のその他の企業データが66項目、合計で206項目から構成されている。

このデータベースが日本開発銀行によって開発された経緯からか、販売には学術研究のみの使用目的であることの誓約書を提出することが求められる。誓約書には、機関名・部署名を明記し印鑑付きの利用者の署名が必要である。また、提供された後は、研究報告書を公表したり研究報告を行ったりする都度、研究報告書またはレジメ・配布資料を同研究所へ提出することが求められている。

以上は、第5表のようにまとめられる。

第5表 『企業財務データバンク』の概要

- | | |
|-----------|--|
| 1. 名 称 | 『企業財務データバンク』(連結決算データ) |
| 2. 提供機関 | (財)日本経済研究所
(〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-3-4, 電話03-5280-6102) |
| 3. 収録期間 | 昭和53年(1978)3月～平成8年(1997) |
| 4. データ項目 | 連結貸借対照表(94項目)、連結損益および剰余金計算書(43項目) ^(注ア) 、キー項目および決算基準項目(66項目) |
| 5. 収録会社数 | 1,638社19,350レコード |
| 6. 提供メディア | CD-ROM |

7. 価 格 ……¥525,000 (税込み)

8. 添付資料

①開銀企業財務データ・連結決算データ財務諸表 (C) 収録会社・決算期一覧表, ②開銀企業財務データバンク概要説明書 (CD-ROM用), ③開銀企業財務データバンクデータマニュアル, ④開銀企業財務データバンク収録会社一覧表 (五十音順), ⑤開銀企業財務データバンク収録会社一覧表 (コード順)

9. 条 件 ……購入時の誓約書, 学会等報告および論文執筆のたびにレジメ・配布資料または報告書提出

注ア. 「連結損益および剰余金計算書」は, (財) 日本経済研究所の表記である。

資料2. LotusApproachによる『企業財務データバンク』の利用方法

1. とりあえずの利用開始

(1) ハードウェアの確認

CD-ROMをCD-ROMドライブにセットする。メモリー容量を確認する。このために、スタートをクリックして、設定 (S)、コントロールパネル (C)、システム、の順で「システムのプロパティ」を開く。初期設定により「情報」のページが開いていれば、「パフォーマンス」のタブをクリックする。「パフォーマンスの状態」が表示され、上から、メモリ、システムリソースが示される。RAMxx.xMB, XX%の空き、が示される。筆者のパソコンは当初16MBの空きであったために、容量が不足していることが明らかとなり、96MBに増設した。

(CompaqWindowsでは、設定、コントロールパネル、CompaqDiagnosticsでもよい。「概要」が表示され、システム、メモリーxxメガバイトが示される。)

(2) LotusApproachの起動と開始

LotusApproachを起動する (メニューのロータス・アプローチをクリックする)。(著者はLotusSuperOffice97を使用しているため、(財) 日本経済研究所から伝えられている別のデータベース・ソフトであるMicrosoftAccessの操作は省略する。)

「アプローチへようこそ」の窓が空くが、「キャンセル」をクリックして窓を消す。ファイル、開く (Q) で「ファイルを開く」の窓が出る。「ファイルの場所」にapproachとあるが、その右にある▼をクリックして、新たに開いた窓の中のRenketsu

(E) をクリックする。「ファイルの名」に Renketsu.dat と半角英数で手入力する。「ファイルの種類」は右の▼をクリックしてメニューから「テキスト固定長 (*.TXT)」をクリックする。以上が終わったら、OK をクリックする。「固定長テキストファイルの設定」の窓が開くので、「文字セット」の DOS (PC-8) (D のラジオ・ボタン) をクリックしてから、次のように手入力する。

(3) フィールドの設定

「フィールド名」には、添付資料『開銀企業財務データバンク概要説明書 (CD-ROM 用)』の連結財務諸表の部分から、p.42 と p.45～50 の計 206 項目について、項目名を「フィールド名」に、データ種類を「データ型」に、必要桁数を「幅」にそれぞれ入力する。

「データ型」は文字型が初期設定されているが、この文字型という部分をクリックすると▼が出てくるので、その中から文字型か数値型をクリックする。数値型の部分はクリックの感度が悪く時刻型となることがあるので注意すること。「フィールド名」を全部入力した後に、日本語入力モードを解除して、「データ型」と「幅」をまとめて入力してもよい。ただし、「データ型」と「幅」を入力した後で「フィールド名」は入力できない。

同上概要書の必要部分のフィールドのみの設定はできない (例えば、社名 (1) ・資本金・経常利益の 3 項目のみ等)。

(4) 任意のファイル名によるロード

以上が終わったら、OK をクリックする。「新規作成」の窓が開くので、「新規作成先」となっている部分の▼をクリックして (C:) をクリックする。その直下の窓にハードデスク上の既存のファイル名が出るが関係ないので無視する。「ファイル名 (N)」の窓に当データベース用の.dbf を付けた任意のファイル名を入力する (例えば、rendb.dbf)。「ファイルの種類 (T)」には dbaseIV (*.DBF) が自動設定される。「作成 (R)」をクリックして 5 分程待つとデータベースがロードされ、任意のファイル名で保存されたファイル名がハードディスク上に完成する。

(5) ロード結果の確認

試みに、Approach を終了して、再び、起動する。「アプローチへようこそ」の窓が空く。ここでは、Approach 上で開かれたファイルがすべて示されている。一番上には、作成されたファイルがハイライトされているので窓の下の方の中央の OK をクリックしてファイルを開く。

(6) タブ名の設定

右のタブをクリックして開かれるのは、Lotus123と同じく、19,350行×206列の表の1セルに1データずつが入力されているワークシートである。左のタブをクリックして開かれるのは、ワークシートでポインターが置かれている行、すなわち目的とする会社のある決算年度のデータである。

それぞれのタブに名称を付けてワークシートとフォームを使いやすくする。右のタブをクリックして好みのワークシート名を付ける。左のタブをクリックして同様に好みのフォーム名を付ける。

(7) エラーの表示

更に、ロード直後は、Approachでは、ワークシートの68列の項目名をフォームのフィールド名として自動的に表示するように設定してあるのに対して、当データベースでは206であるために、この初期設定を越えてしまう。手動による追加修正を実施するように促す次のエラーメッセージが出る。

「選択されたフィールドのすべてを本体に表示することはできません。最初の68フィールドのみ追加されます。デザイン・モードでフォームとワークシートに残りのフィールドを追加して下さい。」

(8) デザイン・モードによるエラーの解決

この解決のために、「デザイン」をクリックしてデザイン・モードにして必要事項を追加する。

追加の方法は次のように行う。

- ①「デザイン」→「フィールド追加」→「追加するフィールド」→メニューから「フィールドの作成」(左列の下から3つ目)を選ぶ。
- ②「プロパティ」の窓の中で「データベース」が現在操作中のファイル名であることを確認→「フィールド」には、一番上に「会社名(1)」が出ているので▼をクリックしながら必要項目名を探してクリックして選ぶ。
- ③モニター上方にあるファイル上書保存(右下向きの太矢印)のアイコンをクリックしてすぐに保存する。

2. 利用環境の整備

(1) フィールド名の変更

とりあえずの利用は以上で可能であるが、より使い易くするためには、以下の作業を行い、フィールド名を変更するとよい。(例：CF78を資本準備金に変更する)

- ア フィールドを追加するアイコンをクリック
- イ 適当な場所にフィールドを追加
- ウ フィールド名の窓の▼をクリックして選ぶ
- エ 「フィールドの定義」をクリック
- オ CF78が出たらクリック
- カ F2キー押す
- キ BackSpace押してCF78を消す
- ク 「資本準備金」ENTER
- ケ OKクリック
- コ 今設定したフィールドをdelete
- サ その他のフィールドの変更は、アイウを繰返す。

(2) db上で計算する(例：207番目の項目にを「流動比率」を設定する)，
「フィールド定義 (D)」をクリック→「フィールド定義」の窓が開く→207番目の行 (CF188) を出す→CF188の下をクリック→「流動比率」入力→データ型をクリックして、右に現れる▼をクリック→計算型をクリック→「式の定義／集計の定義」の窓が開く→「式 (F)」の窓に「流動資産／流動負債」と入力→OKクリック→アイコン「フィールドの作成」をクリックしてフィールド設定エリア設定→「基本」をクリック→「フィールド」の窓の▼をクリックして207行目までドラッグする→大文字のZ (フォント、文字飾り、文字の色) をクリックする→「文字揃え」の右寄せをクリック→#をクリックして表示形式の窓を出す→「数値形式」をクリック→右の窓から「小数点付きパーセント」をクリック→その下の「小数点の位置」の▼または▲で1を選ぶ→完成

(3) 金額データのコンマ位取り，
フォームにして、必要なフィールドをクリックして、「デザイン」→アイコン「インフォボックスの表示」をクリック→#→「数値形式」フィールドの数値がコンマ付きになる，

図 25 Lotus Approach による『開銀企業財務データ』のフォーム例

(4) 数値の右寄せ

追加したフィールドの数値が左寄せならこのままのインフォボックスの上部のメニューの最左端（大文字のZ）をクリック→「文字揃え」から右寄せをクリック→右寄せになる。

(5) フィールドの地色の変更

フィールドの地色は初期設定で白だが変更するためには、「インフォボックスの表示」をクリック→インフォボックスの上部のメニューのカラーチャートをクリック→フィールドごとに設定→設定した色になる。

(6) 壁紙の色付けと模様付け、

「インフォボックスの表示」のカラーチャートをクリック→「塗りつぶす色」をクリックして好みの色を選ぶ。

(7) 日付けと時間の書込み

フォーム表示にデート&タイム・スタンプをする。「デザイン」を選んで、日付は、アイコン「今日の日付を挿入」（16が出ている日めくりカレンダー）をクリックして、スタンプする場所をドラッグして設定する。時間は、アイコン「現在時間の挿入」（丸いアナログ時計）をクリックして、スタンプする場所をドラッグして設定する。

(8) 印刷

タブ「開銀企業財務データ」をクリックして、印刷する会社と会計期のフォームを出して、プリンターのアイコンをクリックする（図25）。

(9) 今後の課題

次の点は平成10年度の課題である。

- ① フィールドを設定済みの以上のファイルに更にリニューアル・データをロードできるだろうか？これは十分挑戦するに値する課題である。
- ② 連結ファイルと個別ファイルとの結合。これも、解決すべき今後の課題である。
- ③ 経営分析への統計処理の適用。回帰分析は、行ったが、その他の統計処理を適用することによる検討が課題である。

資料 3. 連結経営分析の展開

1. 連結経営分析の意義と利用

連結財務諸表の経営分析をどのように管理会計論の教育または管理会計の研究に使うかというのが次の問題となる。まず教育面の利用は、データベース自体の習熟を目的とする情報ツールの演習教材としての利用がある。次に教育にも研究にも適用できる分野は、個別決算を前提として発展してきた経営分析を連結財務諸表の経営分析にも適用することと、連結財務諸表と個別財務諸表の項目別金額の比較、投資等の説明注記に記載された子会社の分析、等が考えられる。この前提として、連結管理会計ともいえる概念も必要である。

2. 経営分析対象会社の選定

『企業財務データバンク』に収録されているフードサービス業は、開銀業種コード 40331 の中で分類されている。開銀会社コードは同一業種の中で一定のルールによって付けられた番号ではないようであり、昇順または降順による検索はできない。フードサービス業に該当する会社は第 6 表のとおり 9 社ある。収録レコード数は、16310～16381 の計 72 レコードある。

第 6 表 『企業財務データバンク』（連結決算版）に収録されている
フードサービス会社

① 西洋フードシステムズ	3617	7603-9603	21
② ロイヤル	4982	9512-9512	1
③ 東天紅	5872	8502-8802	4
④ リンガーハット	6536	8702-9602	10
⑤ すかいらく	6543	8112-9512	15
⑥ サト	6832	9503-9603	2
⑦ モスフードサービス	7613	8703-9603	10
⑧ 日本ケンタッキー・フライド・チキン	38414	9211-9511	4
⑨ テンアライド	39168	9203-9603	5

注：数字は、開銀会社コード、連結決算開始期一連結決算最近期、収録レコード数である。

以上から連結財務諸表の開示が 10 年以上に及んでいる、西洋フードシステムズ、

リンガーハット、すかいらくおよびモスフードサービスの4社について連結決算と個別決算の財務諸表分析を行う。

3. 経営分析の実施

(1) 4社の会計期間と表示決算年

4社は次のように3種類の決算日となっている。「すかいらく」は年末が決算日である。一方、他の3社は「すかいらく」の決算が終わって2～3月の決算である。従って3社の決算年と「すかいらく」の前年表示分は、2～3月の月差があるものの実質的に同じ年となる。

第7表 決算日の4社比較

西洋フードシステムズ	4/1～3/31	19XX年
リンガーハット	3/1～2/28	19XX年
すかいらく	1/1～12/31	19XX-1年
モスフードサービス	4/1～3/31	19XX年

(2) グラフの作成の準備作業

Lotus123上でのグラフ作成は次のように行う。(この操作手順は、CompaqDeskpro4000上のLotus123 97Jのものである。同ソフトはバージョンアップの度に操作方法がまったく別の製品ようになって、操作の継承性がないことが多々あるので、当稿で解説されている操作方法がそのまま利用できるか、注意が必要である。)

a データの入力

画面上部のタブをクリックして会社名を入力する。1～2行を見出し、3～18行を連結決算データ、20行～35行を個別決算データ、26行を注のメモ、37行をグラフの名称(グラフ作成時に「タイトル1」で使用する)、38行以下をプログラム計算等による得るデータとする。

列幅は、Aが3、Bが8、Cから右が7とする。文字サイズは初期設定のとおりであり、英字・日本語・数字共に12である。ただし、会計期・決算種類・売上総利益は10、負債資本合計は8としている。

b フロッピーへのバックアップ

ここまで作業が進んだらフロッピーに記憶する。ファイル (F) → 名前を付けて保存 (A) → 保存する場所 (I) の窓には123が出ているので▼印をクリックして更に新たに出た▲を2回クリック→3.5インチFD (A) をクリック→ファイル名 (N) の窓にSKL1998を入力する→保存 (S) をクリックする。

c その他のデータの入力

会計期間と決算日当日の西暦年の表示は、連結決算の部に会計期間、個別決算の部に西暦年を表示する。

37行にはグラフのタイトル用に、セルB37, C37, D37, E37の順に、「売上高の推移」、「営業利益の推移」、「経常利益の推移」、「正味運転資本の推移」を入力して、文字サイズを8に設定する。

d 罫線の扱い

罫線はデータ入力時には付けておくが、グラフ作成時はメモリ領域確保のために消去する。西暦年のセルに付けたシェードは、消去しない。

(3) 基本グラフの作成

以下では、「すかいらく」の第25期～第34期(1986年～1995年)の売上高をグラフ表示する。金額は億円単位とする。

①データの億円単位への調整

データは百万円単位で入力してあるために、2桁ずらして億円単位とする。準備として、ポインターをセルC15に当てる。

操作は、F2キーを押して、テンキー付近の左矢印キーを2回押し、(ピリオド)を押す、右矢印キーを押す。これで第25期(1986年)の連結決算の売上高は、103,534百万円から1,035.34億円になった。この時点でポインターは第26期に移っているから、以上の操作を繰り返す。

②ラフなグラフの作成

ポインターをセルC15に当てて、マウスを左クリックしながら、セルL15までドラッグする。パッとマウスから指を離して、画面上部の「作成 (C)」をクリックして、出たメニューから「グラフ (C)」をクリックする。キーPageDownを1回押して画面を下げる。マウスでポインターをセルA50に当ててから左クリックしてそのまま指を離さずにH50までドラッグし、そのままH65まで下へドラ

ッグする。指をパッと離す。とりあえずのグラフができる。

③タイトルの作成

画面の上部のメニューからマウスでポインターをグラフ（G）に当てて、出てきたメニューからタイトル（T）をクリックする。タイトル1の窓に「タイトル」と出ているのでマウスで「ル」の右にポインターを当てて、左クリックする。カーソルが点滅したら BackSpace キーを4回押して A:B37 と入力して、その右のセルと表示されている小窓をクリックする。

タイトル2の窓に A:D2 と入力して、その右のセルと表示されている小窓をクリックする。

「売上高の推移」と「すかいらーく」が2層でタイトル表示される。タイトル3は記憶後のファイル呼出しでは表示されないので省略する。

④Y軸表示の設定

マウスで画面左の「Y軸」をクリックする。プロパティの中の「タイトルの表示」の窓の「軸」の右にマウスを当てる。カーソルが点滅したら BackSpace キーを2回押して A:D36 と入力して、その右のセルと表示されている小窓をクリックする。

⑤X軸表示と西暦年の設定

マウスで画面下の「X軸」をクリックする。プロパティの中の「タイトルの表示」の窓にマウスを当てる。カーソルが点滅したら BackSpace キーを2回押して A:B20 と入力して、その右のセルと表示されている小窓をクリックする。次いで、「決算年」と表示されたすぐ上の5をクリックする。プロパティの「ラベル」のタブをクリックする。下に出てきた「範囲」の右の左上を向く矢印をクリックして、PageUp を1回押してセル C20 にマウスでポインターを当てて、そのまま指を離さずにセル L20 までドラッグして指をパッと離す。

グラフの画面に戻らずにワークシートの表のままなら、PageDown を押してグラフに戻る。

⑥凡例の設定

マウスで1990年の棒グラフの中心を左クリックする。プロパティの下にある「凡例のラベル」の窓の中の「A」の右にマウスを当てる。カーソルが点滅したら BackSpace キーを6回押して A:C4 と入力して、その右のセルと表示されている小窓をクリックする。

⑦個別決算の売上高の追加

同じプロパティの上にある「オプション」のラベルをクリックする。連結と出ている▼にマウスを当て「[データセット 2]—空」をクリックする。その 2 cm ほど下にある左上を向く矢印をクリックして、PageUp を 1 回押してセル C32 にマウスでポインターを当てて、そのまま指を離さずにセル L32 までドラッグして指をパッと離す。

グラフの画面に戻らずにワークシートの表のままなら、PageDown を押してグラフに戻す。

プロパティの下にある「凡例のラベル」に A:C21 を入力して、その右のセルと表示されている小窓をクリックする。以上でグラフの大半が完成する。

(4) グラフの整備

①データの表示

同じプロパティの最上部の中央やや右にある▼をクリックして、「データセットのラベル」をクリックする。「連結」と出ている窓のすぐ下にある「値ラベルの表示」の小窓をクリックしてすると連結決算の売上高の金額データが棒グラフの上に現れる。

次いで連結の右の▼をクリックして窓の中の「個別」をクリックする。上と同様に、「値ラベルの表示」の小窓をクリックしてすると個別決算の売上高の金額データが棒グラフの上に現れる。

②枠の変更と設定

グラフ内部の余白部をクリックする。現れた窓の上部にある 2 番目のカラーチャートのラベルをクリックする。背景色の▼をクリックする。細かなカラーチャートの部分の最上部の左から 3 番目をクリックするとグラフ全体が薄い黄色となる。

次いで模様▼をクリックして、最下段の右から 4 番目をクリックする。次いで、模様の色▼をクリックして、細かなカラーチャートの最上段の右から 2 番目をクリックする。

同じプロパティの下にある「装飾枠」の小窓をクリックする。最上段の右の枠をクリックする。その右の枠の色▼をクリックしてカラーチャートの最上段の左から 3 番目をクリックする。(以上の操作によって地色が薄い黄色で右方が徐々にピンクになる、赤い細い罫で囲われた薄い影の付いたグラフが出来る。)

③ Y軸のラベルのコンマ付け

Y軸の数字3000をクリックする。プロパティの上部のラベル「#」をクリックして、窓から「コンマ」をクリックする。たあし、このままでは、小数点未満2桁を付けたままなので、プロパティの下の中央にある「小数点の位置」の▼を2回押して小数点未満を消去する。

④ グラフのデザインの変更

マウスで1990年の棒グラフの中心を左クリックする。現れたプロパティのカラーチャート・アイコンのラベル（上部の左端）をクリックする。模様 ▼ をクリックして、左から4列目の上から2行目の模様（連続右肩上り斜線）をクリックする。次に、模様の色 ▼ をクリックして、右から2列目の1番上（濃い青色）をクリックする。次に、背景の色 ▼ をクリックして、左の1列目の1番上（白色）をクリックする。

⑤ 枠の設定の変更

同じプロパティの色 ▼ をクリックして、左から2列目の1番上をクリック（濃い青色）する。線幅 ▼ をクリックして、上から3番目をクリック（太い罫）する。線種は変更しない方がよい。

⑥ 画面サイズの変更

グラフ画面内部の余白をクリックすると枠の周囲に8個の小さな黒い四角形が現れる（以下、■とする）。

右下の■（4時半方向）をマウスで右下へ引くとグラフは拡大する。逆なら縮小する。

右中の■（3時方向）を右へ引くと横幅拡大、左へ引くと横幅縮小する。

下中の■（6時方向）を下へ引くと丈幅拡大、上へ引くと丈幅縮小する。

⑦ 文字サイズの設定

グラフの中の文字と数字のサイズを変更するためには、変更すべき文字または数字にマウスを当ててクリックし、モニター画面左下のフォント・サイズの数字をクリックして下のサイズにより変更する。

タイトル118

タイトル214

凡例10

Y軸名とラベル ...10

X 軸名12
 X 軸のラベル 8
 データラベル10

⑧画面の印刷

グラフ全体を覆っているセルA50からH65をマウスでドラッグして、指をパッと離す。

モニター画面上部のプリンター・マークの印刷アイコンをクリックする。この後の手順は使用しているプリンターの指示に従う（通常は「OK」または「印刷」をクリックする，作例図26）。

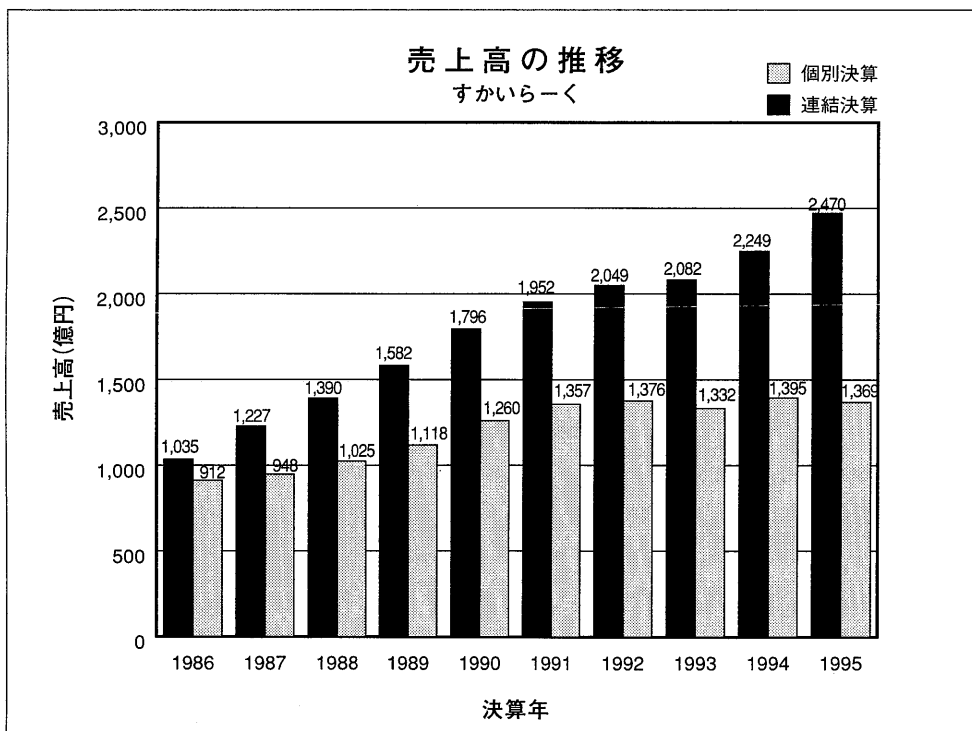


図26 グラフ作例（すかいらーく売上高の推移）

資料4．キー操作

SHIFTキーによる貼付，挿入，上書の操作は次のとおりである。

1. SHIFTと0（NumLock解除）で直近のコピーまたは切り取りの糊付，
2. SHIFTと0（NumLock点灯）で挿入→上書→挿入

第8表 すかいらーく回帰分析データ

決算種類	連 結						個 別					
決算年	売上高	営業利益	経常利益	固定資産	正味運転資本	流動比率	売上高	営業利益	経常利益	固定資産	正味運転資本	流動比率
1986	1,035	97	108	447	100	167%	912	90	101	417	88	182%
1987	1,227	111	123	525	323	271%	948	91	104	469	329	436%
1988	1,390	111	131	599	300	229%	1,025	86	107	524	314	389%
1989	1,582	128	151	689	301	210%	1,118	95	120	599	288	297%
1990	1,796	129	153	829	215	170%	1,260	104	132	700	210	220%
1991	1,952	137	158	953	179	133%	1,357	104	133	788	185	145%
1992	2,049	121	126	1,030	139	145%	1,376	99	113	827	176	259%
1993	2,082	104	106	1,207	161	142%	1,332	82	94	1,021	192	218%
1994	2,249	127	132	1,235	115	122%	1,395	92	107	1,012	243	286%
1995	2,470	114	118	1,521	-279	70%	1,369	68	83	1,083	-3	99%
X係数	152	1.4	-0.3	114.13	-36.8	15.7%	58.5	-1.2	-1.4	79.1	-1,455.7	-17.2%
Y切片	-300,847	-2,577	696	-226,268	73,436	31,226%	-115,334	2,522	2,846	-156,750	2,917,777	34.526%
Y値偏差	65.5	12.8	19.3	54.8	139.6	35.3%	87.2	10.9	16.1	35.2	9,802.4	95.7%
R2	0.98	0.10	0.00	0.98	0.42	0.67	0.87	0.11	0.07	0.98	0.19	0.25%

注：1.流動比率以外単位億円。2.回帰分析の略称は本文記載に同じ。 以下同。

第9表 西洋フードシステムの回帰分析データ

決算種類	連 結						個 別					
決算年	売上高	営業利益	経常利益	固定資産	正味運転資本	流動比率	売上高	営業利益	経常利益	固定資産	正味運転資本	流動比率
1987	550	24	39	265	144	277%	550	24	39	550	144	278%
1988	628	31	42	371	67	169%	628	31	43	628	67	170%
1989	711	36	45	494	161	239%	711	36	46	711	162	240%
1990	763	37	46	580	197	241%	763	37	48	763	196	241%
1991	867	49	50	690	155	152%	867	49	52	867	154	151%
1992	940	56	48	800	246	265%	903	62	54	903	248	281%
1993	976	55	37	934	42	115%	918	59	44	918	41	115%
1994	963	41	30	901	113	191%	906	43	36	906	113	195%
1995	961	45	32	937	62	141%	919	47	37	919	62	143%
1996	976	59	41	1,009	-156	49%	920	57	42	920	-160	47%
X係数	49.3	3.0	-0.9	84.0	-20.3	-17%	41.5	3.2	-0.4	41.5	-20.5	-16.6%
Y切片	-97,379	-5,884	1,916	-166,621	40,517	33,412%	-81,808	-6,267	822	-81,808	40,993	33,269%
Y値偏差	59.3	7.5	6.4	59.86	98.1	55.5%	58.8	8.8	6.3	58.79	99.2	59.6%
R2	0.88	0.62	0.18	0.95	0.31	0.48	0.84	0.57	0.04	0.84	0.31	0.44

第10表 モスフードサービスの回帰分析データ

決算種類	連 結						個 別					
決算年	売上高	営業利益	経常利益	固定資産	正味運転資本	流動比率	売上高	営業利益	経常利益	固定資産	正味運転資本	流動比率
1987	156	14	18	42	6	116%	115	14	18	31	9	126%
1988	219	24	25	57	97	295%	218	24	25	48	101	337%
1989	278	28	33	142	27	143%	264	28	33	130	36	170%
1990	350	33	39	201	92	226%	332	34	40	207	81	226%
1991	430	38	45	229	85	195%	404	42	50	230	82	205%
1992	487	42	47	248	112	228%	457	45	51	257	105	237%
1993	539	47	47	281	100	199%	504	50	50	286	100	213%
1994	590	60	64	295	122	226%	550	62	65	288	119	243%
1995	628	63	66	373	71	164%	588	62	65	366	66	168%
1996	642	63	68	352	115	204%	594	64	69	351	111	126%
X係数	57.1	5.6	5.5	36.5	8.0	1.5%	51.7	5.7	5.6	37.3	7.1	-5%
Y切片	-113,227	-11,079	-10,920	-72,541.00	-15,906	-2,721%	-102,599	-11,286	-11,196	-74,127	-14,040	10,163%
Y値偏差	25.1	2.8	3.4	26.55	31.2	53.2%	23.4	2.8	3.8	30.47	29.5	64.6%
R2	0.98	0.98	0.96	0.95	0.41	0.01	0.98	0.98	0.96	0.94	0.37	0.06

第11表 リンガーハットの回帰分析データ

決算種類	連 結						個 別					
決算年	売上高	営業利益	経常利益	固定資産	正味運転資本	流動比率	売上高	営業利益	経常利益	固定資産	正味運転資本	流動比率
1987	122	10	9	69	-7	82%	113	10	9	68	-7	80%
1988	139	11	10	88	3	108%	125	11	10	84	5	113%
1989	165	11	10	120	2	105%	144	10	10	113	5	113%
1990	193	9	9	135	17	134%	162	8	9	124	21	154%
1991	227	16	11	146	-21	78%	185	15	12	134	-16	81%
1992	257	17	9	156	5	107%	206	15	9	142	5	108%
1993	261	16	11	155	8	112%	206	13	10	138	10	120%
1994	266	11	2	156	1	103%	202	8	1	137	3	107%
1995	263	19	5	158	-12	78%	200	14	2	130	-4	90%
1996	275	21	13	171	-27	54%	198	16	10	136	-16	61%
X係数	18.1	1.1	-0.2	10.0	-1.8	-3%	10.5	0.5	-0.6	6.7	-1.0	-3%
Y切片	-35,814	-2,189	362	-19,855	3,484.5	6,240%	-20,732	-1,014	1,126	-13,148	1,909	5,377%
Y値偏差	19.1	2.8	3.4	14.4	13.3	22.1%	16.8	2.8	3.6	15.9	11.7	26.2%
R2	0.90	0.62	0.03	0.83	0.15	0.17	0.80	0.26	0.20	0.64	0.06	0.1

注：回帰分析の略称は本文記載に同じ

資料5. 図表目次

- 第1表 すかいらーくの回帰分析
- 第2表 西洋フードシステムズの回帰分析
- 第3表 モスフードサービスの回帰分析
- 第4表 リンガーハットの回帰分析
- 第5表『企業財務データバンク』の概要
- 第6表『企業財務データバンク』（連結決算版）に収録されているフードサービス会社
- 第7表 決算日の4社比較
- 第8表 すかいらーくの回帰分析データ
- 第9表 西洋フードシステムズの回帰分析データ
- 第10表 モスフードサービスの回帰分析データ
- 第11表 リンガーハットの回帰分析データ
- 図1 すかいらーくの売上高の推移
- 図2 西洋フードシステムズの売上高の推移
- 図3 モスフードサービスの売上高の推移
- 図4 リンガーハットの売上高の推移
- 図5 すかいらーくの営業利益の推移
- 図6 西洋フードシステムズの営業利益の推移
- 図7 モスフードサービスの営業利益の推移
- 図8 リンガーハットの営業利益の推移
- 図9 すかいらーくの経常利益の推移
- 図10 西洋フードシステムズの経常利益の推移
- 図11 モスフードサービスの経常利益の推移
- 図12 リンガーハットの経常利益の推移
- 図13 すかいらーくの固定資産の推移
- 図14 西洋フードシステムズの固定資産の推移
- 図15 モスフードサービスの固定資産の推移
- 図16 リンガーハットの固定資産の推移
- 図17 すかいらーくの正味運転資本の推移
- 図18 西洋フードシステムズの正味運転資本の推移
- 図19 モスフードサービスの正味運転資本の推移
- 図20 リンガーハットの正味運転資本の推移
- 図21 すかいらーくの流動比率の推移
- 図22 西洋フードシステムズの流動比率の推移

図23 モスフードサービスの流動比率の推移

図24 リンガーハットの流動比率の推移

図25 LotusApproachによる『開銀企業財務データ』のフォーム例

図26 グラフ作例（すかいらーくの売上高の推移）